

序

奈良国立文化財研究所は、1959年以降、継続して平城宮跡で発掘調査を実施してきました。この宮域内の発掘調査は、一定の計画のもとに実施しているものです。これまでに調査を完了した部分は、全宮域のほぼ30パーセント、これによって、多くの事実を解明し、また、新たに多くの問題を提示することができました。

この宮域内の計画的な発掘調査にあわせて、宮域外になる平城京の街区域の発掘調査も断続的に担当しています。その発掘調査のほとんどは、各種の建設土木工事などの予定地を工事の事前に発掘する、いわゆる緊急調査であり、それを奈良県や奈良市の調査組織と分担しているのです。今回報告する平城京左京七条一坊十六坪を中心とし、一部がその十五坪にわたるほぼ1.4ヘクタールの地域の発掘調査もまた、大型小売店舗建設予定地における緊急調査であり、1994年から95年にかけて実施したものでした。

左京七条一坊は、平城宮から南へ2キロメートルほど離れた、平城京南半部の朱雀大路に面した街区にあたります。これまでの街区域における発掘調査の成果からすると、調査にのぞむにあたって、いくつかの問題が浮かんでいました。このあたりは一般的な住宅地域なのか。住宅ではなく、都の特別な施設があった地域か。住宅があったとすれば、その宅地はどの程度の広さを占め、どのような建物がどのように配置されているのか。推定できる居住者はどのような身分の人物か。さらに、街区を区画する街路は、このあたりではどうなっているのか。問題は多岐にわたります。

もちろん今回の一度の発掘調査ですべての問題が解決できるとは
かぎりません。しかし、従来の調査成果とあわせ考えると、今回の
調査によっても、街路と街区の規模と構造、住宅とそれ以外の特別
な施設との交代の状況、平城京終末前後の街区の利用状況など、平
城京の実態を解明し、さらに新たな問題を提起する資料を得ること
ができました。

これまでの平城京の街区域の発掘調査の成果をかえりみますと、
奈良時代史の考究にとって、平城宮跡における発掘調査とならんで、
それらの調査がいかに重要なものであったか、それを強く感じると
ともに、この報告書がその意義をご理解いただく一助になることを
願っています。今回の調査を含めてこれまでの発掘調査における関
係各位のご協力に深く感謝申し上げます。

1997年3月

奈良国立文化財研究所長

田 中 琢

平城京左京七条一坊十五・十六坪

発掘調査報告

目次

第Ⅰ章	序言	1
1	平城京の発掘調査	1
	A 左京七条一坊十六坪の調査	1
	B 平城宮跡における発掘調査と整備事業	2
2	報告書の作成	3
第Ⅱ章	調査概要	5
1	調査の経過	5
2	調査地域	7
	A 位置と環境	7
	B 地区割と測量	9
3	調査の概要	11
	A 第251次調査	11
	B 第252次調査	11
	C 第253次調査	12
	D 第254次調査	12
	E 第255次調査	13
4	調査日誌	14
	A 第251次調査	14
	B 第252次調査	14
	C 第253次調査	19
	D 第254次調査	23
	E 第255次調査	27

第Ⅲ章 遺 跡 ……………29

1 遺跡の概観 ……………29

- A 平城京造営以前の地形……………29 B 平城京廃都後の地形……………31

2 条 坊 遺 構 ……………32

- A 東一坊大路……………32 C 坪境小路……………35
B 六条大路……………35

3 十五・十六坪の遺構 ……………37

- A 奈良時代以前の遺構……………38 C 祭祀関連その他の遺構……………60
B 奈良時代以降の遺構……………38

第Ⅳ章 遺 物 ……………65

1 瓦 埴 類 ……………65

- A 軒丸瓦……………65 C 丸瓦・平瓦……………69
B 軒平瓦……………67 D その他の瓦埴類……………70

2 土 器 ……………71

- A 東一坊大路西側溝出土土器……………72 G 平城京造営以前の土器・
10世紀以降の土器……………86
B 道路側溝出土土器……………78 H 施釉陶器・特殊土製品……………89
C 井戸出土土器……………81 I 祭祀用土器・土製品……………91
D 土抗出土土器……………83 J 墨書・刻書土器……………99
E 埋納遺構・木棺墓出土土器……………84
F 柱穴出土土器……………85

3 木製品・漆塗製品 ……………100

- A 東一坊大路西側溝
出土木製品……………100 C 井戸 SE6657出土木製品 ……105
B 六条大路北側溝出土木製品 ……105 D 遺構に関連する木製品 ……106
E 木棺墓 SX6428出土品 ……106

4	金 属 製 品	107
A	銅製品	107
B	鉄製品	108
C	銅 銭	110
5	ガラス製品・鋳造関連遺物・石製品他	111
A	ガラス製品・鋳造関連遺物	111
B	奈良・平安時代の石製品	113
C	弥生時代以前の石器	114
6	木 簡	116
7	動物遺存体	120
A	出土した動物遺存体	120
B	種ごとの概要	121
C	考 察	122
第V章	自然科学による分析	125
1	左京七条一坊十六坪から出土した 遺構・遺物に残存する脂肪の分析	125
A	土壌試料	125
B	残存脂肪の抽出	126
C	残存脂肪の脂肪酸組成	127
D	残存脂肪のステロール組成	130
E	脂肪酸組成の数理解析	133
F	脂肪酸組成による 種特異性相関	135
G	総 括	136
2	東一坊大路西側溝覆土の珪藻分析	138
A	試 料	138
B	分析方法	140
C	結 果	140
D	溝の堆積環境	148
3	東一坊大路西側溝覆土の花粉分析	151
A	試 料	151
B	方 法	151
C	結 果	151
D	考 察	154
4	金属製品・ガラス関連遺物の分析調査	156
A	分析資料と観察	156
B	調査の結果	156

第VI章 考 察159

1 条 坊 復 原159

- A 十六坪四周の道路復原159
- B 左京七条一坊十六坪の位置162
- C まとめ164

2 遺構の変遷165

- A はじめに165
- B I期の遺構165
- C II期の遺構167
- D III期の遺構169
- E IV期の遺構171
- F V期の遺構172
- G VI期の遺構174
- H まとめ174

3 瓦 埴 類176

- A 瓦の使用状況の検討177
- B 出土軒瓦の問題点181

4 土 器185

- A 十六坪周辺の土器埋納遺構185
- B 出土土器から見た
奈良時代の祭祀.....188

5 金属製人形について196

- A 分 類196
- B 年代・出土遺構197
- C 法 量198
- D 金属製人形の特性199
- E まとめ200

6 木 簡202

7 木棺墓 SX6428206

- A SX6428の概要.....206
- B 木棺墓の集成と
SX6428の分析.....206
- C 畿内中枢部における
古代木棺墓.....207
- D まとめ209

8 結 語211

別 表	214
別 図	239
英文目次	248
英文要約(Englishi Summary)	260
出土木簡积文(抄)	卷末

挿 図

Fig.

1 調査次数と区域	6
2 地区割図.....	10
3 第251次調査区遺構略図	14
4 第252次調査区遺構略図	15
5 第253次調査区遺構略図	20
6 第254次調査区遺構略図	23
7 第255次調査区遺構略図	27
8 平城京造営以前の地形.....	29
9 調査地周辺の流路検出地点.....	30
10 調査地周辺の遺存地割.....	31
11 道路側溝土層図.....	33
12 東一坊大路西側溝.....	34
13 堰 SX6413と堤 SX6452	34
14 東一坊大路西側溝の勾配.....	35
15 土器埋納遺構.....	61
16 木棺墓 SX6428	62
17 橋状遺構 SX6420	63
18 曲物埋設遺構 SX6422	64
19 SD6411・6449・6471・6472出土土器	79

20	柱穴出土土器	86
21	縄文・弥生土器	87
22	平城京廃絶以降の土器	88
23	特殊土製品	90
24	動物遺存体破片割合	120
25	木棺墓 SX6428土壌試料採取位置	126
26	土器埋納遺構 SX6448土壌試料採取位置	126
27	土器埋納遺構 SX6460・6461土壌試料採取位置	126
28	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成(1)	128
29	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成(2)	129
30	試料中に残存する脂肪のステロール組成(1)	130
31	試料中に残存する脂肪のステロール組成(2)	131
32	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	134
33	試料中に残存する脂肪酸組成樹状構造図	135
34	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	136
35	西側溝西方Lラインの土層図および珪藻分析試料採取位置	138
36	西側溝Rラインの土層図および珪藻分析試料採取位置	138
37	西側溝Aラインの土層図および珪藻分析試料採取位置	138
38	西側溝Rライン主要珪藻化石群集	144
39	西側溝Aライン主要珪藻化石群集	147
40	西側溝A・Rラインの花粉化石群集	153
41	埴埴に残存するガラスの鉛同位体比	157
42	埴埴X線回折分析	158
43	関係条坊位置	159
44	十六坪四周の条坊復原	162
45	I期の遺構	166
46	II期の遺構	168
47	III期の遺構	170
48	IV期の遺構	171
49	V期の遺構	173
50	墓尾古墳隣接地甕棺墓出土土器	187
51	竈の製作技法	188
52	SD1250出土土器	192
53	金属製人形の形式	196
54	銅製人形の事例	197
55	木棺墓の規模	206
56	木棺墓の変遷	209

表

Tab.

1	航空写真撮影一覧	9
2	調査次数と中地区の関係	10
3	調査地周辺の流路	30
4	遺構の新旧関係	37
5	遺構別出土金属製品集計表	107
6	西側溝土層別出土ガラス関連遺物	111
7	西側溝鋳造関連遺物土層別出土量	112
8	遺構別出土動物遺存体	120
9	出土種名表	121
10	種類・部位別動物遺存体出土量	121
11	土壌試料の残存脂肪抽出量	127
12	試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合	132
13	珪藻の生態性	139
14	西側溝西方Lライン珪藻分析結果	140
15	西側溝Rライン珪藻分析結果(1)	142
16	西側溝Rライン珪藻分析結果(2)	143
17	西側溝Aライン珪藻分析結果(1)	145
18	西側溝Aライン珪藻分析結果(2)	146
19	花粉分析結果	152
20	錆部分定量分析結果	156
21	金属部分定量分析結果	156
22	関係条坊計測座標一覧	160
23	条坊遺構の関数化	161
24	十六坪四隅の座標	161
25	大路両側溝の心々距離	163
26	出土軒瓦の時期	176
27	銅製人形形式別計測値比較	198
28	鉄製人形形式別・時期別全長分布	198
29	人形時期別計測値比較	198
30	平城京内の南北道路側溝における木簡の出土事例	203
31	木棺墓の分類	208

別 表

1	建築遺構一覧	215
2	遺構別出土木製品一覧表	217
3	東一坊大路西側溝出土土器・土製品一覧	218
4	墨書土器一覧	223
5	銭貨計測表	224
6	石製品一覧表	226
7	動物遺存体一覧表	228
8	東一坊大路西側溝地区別木簡出土点数	232
9	畿内及び周辺の土師器甕埋納遺構	233
10	金属製人形出土例	234
11	銅製人形計測表	235
12	木棺墓一覧表	236
13	木棺墓出土遺物一覧表	237
14	6272A・B、6710A・C、6663F・Jの平城京城での出土一覧表	238

別 図

1	軒瓦の分布	240
2	塼の分布	241
3	丸瓦の分布	242
4	平瓦の分布	243
5	6316A・E・G、6710A・C分布図	244
6	6227A・D、6663F・J分布図	245
7	東一坊大路西側溝地区別出土遺物	246

図 面

Pl.

- 1 遺構実測図の割付
- 2 6AHC—J 東一坊大路実測図
6AHD—A
- 3 6AHD—A 六条大路実測図
6AHH—I
- 4 6AHG—R 東一坊大路西側溝実測図
6AHH—I
- 5 6AHH—H・I 十六坪北西部西半実測図
- 6 6AHH—H・I 十六坪北西部東半実測図
- 7 6AHH—H・I 十六坪北東部西半実測図
- 8 6AHG—Q・R 十六坪北東部東半・東一坊大路西側溝実測図
6AHH—H・I
- 9 6AHG—Q・R 東一坊大路実測図
- 10 6AHH—G・H 十六坪西辺部実測図
- 11 6AHH—G・H 十六坪中央部西半実測図
- 12 6AHH—G・H 十六坪中央部東半実測図
- 13 6AHG—P・Q 十六坪東辺部・東一坊大路西側溝実測図
6AHH—G・H
- 14 6AHH—G・H 七条条間北小路・東一坊坊間東小路実測図
- 15 6AHH—G・H 十五坪北辺部・十六坪南西部西半・七条条間北小路実測図
- 16 6AHH—G・H 十五坪北辺部・十六坪南西部東半・七条条間北小路実測図
- 17 6AHH—G・H 十五坪北辺部・十六坪南東部西半・七条条間北小路実測図
- 18 6AHG—O・P 十五坪北辺部・十六坪南東部東半・東一坊大路西側溝・
6AHH—G・H 七条条間北小路実測図
- 19 井戸実測図
- 20 祭祀土坑 SX6530実測図
- 21 軒丸瓦実測図 1
- 22 軒丸瓦実測図 2・道具瓦実測図
- 23・24 軒平瓦実測図 1・2
- 25・26 SD6400出土土師器実測図 1・2
- 27～31 SD6400出土須恵器実測図 1～5
- 32・33 井戸出土土器実測図 1・2
- 34 土坑出土土器実測図
- 35 祭祀土坑・埋納遺構出土土器実測図

- 36 埋納遺構・木棺墓出土土器実測図
- 37 施釉陶器・硯実測図
- 38～41 墨書人面土器実測図 1～4
- 42 小型模造土器実測図
- 43・44 土馬実測図 1・2
- 45 墨書土器実測図 1
- 46 墨書土器実測図 2・刻書土器実測図
- 47 墨書土器実測図 3
- 48～52 SD6400出土木製品実測図 1～5
- 53 SD6451・SE6457・SX6428出土木製品等実測図
- 54 SD6400出土銅・鉄製品実測図
- 55 SD6400出土鉄製品実測図
- 56 SD6400出土ガラス製品・鑄造関連遺物実測図
- 57 鑄造関連遺物実測図
- 58 奈良・平安時代の石製品実測図
- 59 弥生時代以前の石器実測図

付図（巻末袋入り）

平城京左京七条一坊十五・十六坪遺構集成図

原色写真

巻首図版 SD6400出土祭祀関連遺物

Color Ph.

- 1 上 第252次調査区
下 第254次調査区
- 2 祭祀土坑 SX6530
- 3 木棺墓 SX6428
- 4 上 木製人形
下 下駄・木印
- 5 上 金属製人形
下 海老錠
- 6 上 ガラス製品関連遺物
下 鋳造関連遺物
- 7 上 石製品
下 石 器
- 8 琴形木製品

写 真

Ph.

- 1 調査地周辺の地形 1・2
- 2 東一坊大路西側溝 1・2
- 3 東一坊大路・東一坊大路東側溝
- 4 六条大路 1～3
- 5 七条条間北小路・東一坊坊間東小路
- 6 第251次調査区
- 7・8 第252次調査区 1・2
- 9・10 第253次調査区 1・2
- 11～16 第254次調査区 1～6
- 17～20 第255次調査区 1～4
- 21 橋・土坑
- 22 溝・祭祀土坑・木棺墓

23	井戸・曲物埋設遺構
24	土器埋納遺構
25	軒丸瓦
26	軒平瓦・文様塼
27	丸瓦・平瓦・土管
28	祭祀用土器・土製品・硯の製作技法
29～31	SD6400出土土師器 1～3
32～35	SD6400出土須恵器 1～4
36	道路側溝・柱穴出土土器
37～39	井戸出土土器 1～3
40	井戸出土土器 4・土坑出土土器
41・42	埋納遺構出土土器 1・2
43	平城京造営以前・廃絶以降の土器
44	施釉陶器・特殊土製品
45～56	墨書人面土器 1～12
57・58	小型模造土器 1・2
59～61	土馬 1～3
62・63	SD6400出土墨書土器 1・2
64	墨書土器・刻書土器
65・66	SD6400出土木製品 1・2
67・68	SD6400・SE6657出土木製品 1・2
69・70	SD6400出土金属製品 1・2
71	SD6400出土銭貨
72	SD6400出土ガラス関連遺物
73	鑄造関連遺物
74	奈良・平安時代の石製品
75～79	木簡 1～5
80	木簡 6（琴形木製品）
81	SD6400・SX6530出土動物遺存体
82	X線CT写真
83・84	SD6400出土珪藻化石 1・2
85	SD6400出土花粉化石

第 I 章 序 言

この報告書は、平城京左京七条一坊十五・十六坪において、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1994年度に実施した、第251次、第252次、第253次、第254次、第255次調査の結果をまとめたものである。

1 平城京の発掘調査

A 左京七条一坊十六坪の調査

1980年代のバブル経済の崩壊後、平城京域における開発工事は奈良市などが行う公共工事を除いて急速に減退し、同時に事前の発掘調査も減少した。当調査部においても1986～89年に実施した「そごう百貨店」建設工事に伴って長屋王邸・藤原麻呂邸を発見してからのち、京域での大規模な発掘調査にたずさわっていない。

奈良市の南郊に当たる国道24号線の沿線では、旧24号線のバイパスとして開設して以来、大型小売店舗・流通倉庫・郊外型レストラン・簡易ホテルなどが徐々に進出して水田地帯を蚕食しており、現在でもその趨勢はとどまっている。94年度に当調査部が発掘調査を担当した調査地域もそうした大型小売店舗新築に伴う開発工事に関わるのもで、奈良時代の東一坊大路を南下してきた国道が約120 m 西へ移行し、北東から南下する佐保川と交差するあたり、奈良盆地東西線のほぼ中央に当たる低湿地に位置する。

開発対象の敷地総面積は約31,500 m²、その範囲を遺存地割によって確かめてみると、左京七条一坊・七条二坊・六条一坊・六条二坊にわたることが明らかになり、駐車場など地下遺構に影響を及ぼさない範囲を除き、しかもできるだけ1坪全体を発掘するという意図のもとで、七条一坊十六坪を中心とする地域で約14,000 m²の調査地を選んだ。

調査地の南に佐保川が流れる低地に位置することから、洪水などの氾濫で奈良時代の遺構がすでに流出していることも予想され、事実、東一坊大路と六条大路が交差する調査区東北隅あたりの試掘では、中世以降の大規模な氾濫の痕跡が認められた。しかし、十六坪では保存状況がかなり良好で、厚さ約1 mの堆積土をのぞいて奈良時代の遺構を検出した。

これまで、発掘調査例や地勢によって、京域を南北にほぼ二分する五条ないしは六条大路以北が1町以上の宅地を占拠する貴族の邸宅の区域であり、それ以南が坪内を細分した下級役人などの小住宅が集合する地域であると考えられてきた。しかしながら、十六坪では1坪という広い敷地の利用状況が明らかになった。発掘調査時には東一坊大路西側溝から埴輪などの鑄造関係の遺物を発見していることから、鑄造関係の工房跡あるいは工房を管理する役所ではないかという説も提起されたが、敷地内には工房の存在を伺わす遺物が出土せず、住宅とする見解が強くなった。その解答については本文中で明らかにするであろうが、条坊地割内に散在する宅地の様相については、それぞれの地域によってかなり大きな違いがあり、京域の住み分けについて一定のルールを設定するのには、まだ実例が不足していることを改めて認識させられた。

B 平城宮跡における発掘調査と整備事業

この場を借りて、最近の平城宮跡における発掘調査と整備事業の要点について簡単に触れておこう。1993年度までの動向については『平城宮発掘調査報告 XIV』で述べており、ここでは94～96年の事業が対象となる。

平城宮跡の
発掘調査

発掘調査 西面中央門である佐伯門内で右馬寮の遺構を検出した。東西を掘立柱塀で区画するほぼ中央に正殿を置き、それに西脇殿と後殿がともなう。この状況は佐伯門内の北側で明らかになっている左馬寮と酷似し、南方に馬場・馬房が展開する右馬寮の北郭にあたるものと想定した（1994年度調査）。

東方の遺構展示館に隣接する駐車場整備のため、造酒司の南区域を発掘した。造酒司南面築地と南門を検出し、造酒司敷として一辺約120 m（400尺）の方形区画が想定できた。なお造酒司の南には幅約20 mの宮内道路が東西に延びる（1995年度調査）。

第二次朝堂院において東第六堂・南門・南面築地を発掘して、第二次朝堂院の全貌が明らかになった。下層遺構として奈良時代前半の掘立柱朝堂・南門・南面塀があり、うえに奈良時代後半の礎石付瓦葺き朝堂・南門・南面築地が重なる。ただし、上層の東面築地は南に延び朝集殿院を囲むが、下層の掘立柱塀は南に延びず、部分的に調査区を拡張した東朝集殿北辺でも下層朝集殿の遺構を認めていない（1995・1996年度調査）。

1980年以来の調査によって、壬生門内の東側に式部省と神祇官があり、神祇官の東面築地に接して東側に官衙ブロックが予想された。発掘の結果、北面に正門を開く官衙が奈良時代を通じて存在し、平安宮を参考にすると神祇官の東院になる（1996年度調査）。

朱雀門の
復原

朱雀門・東院庭園の復原整備 1993年度の補正予算によって、朱雀門（総額36億円）・東院（総額20億円）の復原整備費が計上された。朱雀門については92年度に基壇の整備が終了しており、建築本体の復原が中心となる。基本的には伝統的な木造建築として復原するのだが、建築基準法に基づきいくつかの強度補強が問題となり、ところどころに現代技術による補強を大幅に加味することになった。阪神大震災の影響などによって工事の遅延が余儀なくされたが、97年度中には完成する。

東院庭園については園池付近の調査を完了していたが、南面大垣及び園池の西方区域については発掘調査が及んでいなかったため、工事前の発掘調査から始まった。その結果、南面大垣で奈良時代後半の宮城門を発見するなど、新しい所見に基づいて設計変更を行った。また未買収地が残るなどのことから、工事は遅延せざるをえず97年度の完成を期している。

復原研究の
進展

第一次大極殿院の復原研究 第一次大極殿院の復原研究は1989年度から特別研究として基礎調査を開始し、基本設計の段階に立ち至っている。土質・地耐力など各種立地条件にともなう調査を行うとともに、主として意匠を検討するために全域の1/100・大極殿の1/10模型を製作した。また柱・桁・梁・斗拱など木構造の耐震性を検討するため実物大の柱を立てての実験、コンピュータを活用しての構造力学的なシミュレーションも進めている。本格的な復原工事に際しては構造上の問題もさることながら、後殿遺構の直上を通過する通称一条通りの移設など、着手前に解決を必要とする問題が山積しており、今後は奈良県・奈良市など関係機関の協力が強く要請される。

2 報告書の作成

本報告書は、(仮称)ダイエー奈良南店新築工事に伴って、平城京左京七条一坊十六坪を中心に、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、1994年度に実施した第251次、第252次、第253次、第254次、第255次調査の報告である。

以下、発掘調査の責任者(所長・部長)と発掘担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。調査組織

次 数	所 長	部 長	発掘担当者
第251次	田中 琢	町田 章	浅川滋男
第252次	田中 琢	町田 章	内田和伸
第253次	田中 琢	町田 章	長尾 充
第254次	田中 琢	町田 章	岩永省三
第255次	田中 琢	町田 章	加藤真二

白杵勲、小澤毅、小野健吉、岸本直文、小池伸彦、小林謙一、杉山洋、高瀬要一、巽淳一郎、館野和己、玉田芳英、寺崎保広、毛利光俊彦、山岸常人、山崎信二、渡辺晃宏、(三重県教育委員会—船越重伸 東京大学—久保憲一、山之内誠 京都大学—福田美穂 奈良大学—岩崎大介、亀山直樹、小西寛之、高木克彦、望月英史 天理大学—井手正人、木下満代、永田朋子、長田美奈 京都橘女子大学—中村幸代、中山玉生 敦賀女子短期大学—清水由利恵)

報告書の作成は、1995年から2ケ年計画でおこなった。遺構関係の整理は遺構調査室と計測修景調査室があたった。遺物の整理は木製品・金属製品・石製品等を考古第一調査室、土器類を考古第二調査室、瓦埴類を考古第三調査室が分担し、木簡と墨書土器については史料調査室が担当し、歴史研究室が協力した。

本報告は、各執筆者が遺構、遺物を整理検討し、1995年12月から計7回、執筆者を中心とする検討会の討議を経て作成した。

本書の執筆担当者は次のとおりである。

第I章 1 町田 章 2 小林謙一

執筆・協力

第II章 1・2A・3・4 小林 2B 内田和伸

第III章 1・2 内田 3 長尾 充

第IV章 1 岩永省三 2 玉田芳英 3A・B・C・D 4 白杵 勲 3E・5 加藤真二 6 館野和己
7 松井 章

第V章 1 中野益男(帯広畜産大学)、中野寛子・長田正宏(ブコーシャ総合科学研究所) 2・3
パリノ・サーヴェイ株式会社 4 肥塚隆保

第VI章 1 内田 2 長尾 3 岩永 4 玉田 5 白杵 6 館野 7 加藤 8 小林

英文要旨 Edward Walter (天理大学)

樹種の鑑定は光谷拓実、ガラス・鋳物の分析は肥塚隆保があたった。また、金属製品、埴埴の分析調査には、辻本与志一、降旗順子の協力を得た。

写真撮影は佃幹雄と牛嶋茂が担当し、杉本和樹、楠本真紀子、妹尾由佳、森本佐由理の協力

を得た。ただし、第Ⅴ章に使用した写真は、各執筆者が撮影した。

図面・挿図・表等は各執筆者が作成し、以下の各氏の協力を得た。

石塚美恵子、今津朱美、上田元子、浦田智子、大日節子、小倉依子、置田弥生、鎌田礼子、
木ノ下淳美、北野陽子、笹 恵子、杉本陽子、高橋順子、高見ます子、長尾朱美、長谷川陽美、
南本 忍、宮崎美和

本書では、引用・参考文献において、頻出する機関名・書名については、シリーズ番号等を
除き、以下のように略した。

機関名

奈良国立文化財研究所：奈文研
奈良県教育委員会：奈良県教委
奈良県立橿原考古学研究所：橿考研
奈良市教育委員会：奈良市教委
滋賀県教育委員会：滋賀県教委

書 名

平城宮発掘調査報告：平城宮報告
奈良国立文化財研究所年報：年報
平城宮跡発掘調査部発掘調査概報：平城概報
飛鳥藤原宮発掘調査概報；藤原概報
平城宮発掘調査出土木簡概報；平城木簡概報
奈良県史跡名勝天然記念物調査報告：奈良県報告
奈良県遺跡調査概報：奈良県概報
奈良市埋蔵文化財発掘調査概要：奈良市概要

本書の編集は平城宮跡発掘調査部長町田章の指導のもとに、小林謙一がおこなった。

第II章 調査概要

1 調査の経過

1993年11月25日、平城京左京六条一坊十三坪・七条一坊十五・十六坪（奈良市八条町5丁目452他43筆）における、(仮称)ダイエー奈良南店建設に伴う埋蔵文化財発掘届が(株)ヒラサワから奈良県教育委員会に提出された。敷地面積31,497 m²、建築面積17,468 m² にもおよぶ大規模な計画であった。奈良県、奈良市、地元との間で開発に対する協議が進められる一方で、1994年1月には、事前に発掘調査を実施することになり、1994年4月には、奈良県教育委員会から、奈良国立文化財研究所に発掘調査の依頼があった。

調査に至る
経過

これを受けて、奈良国立文化財研究所は、発掘調査を実施するにあたり、店舗建設が予定され、かつ事業地にその大部分が含まれる十六坪を集中して発掘するとともに、事業地の東辺に想定される東一坊大路西側溝を可能な限り発掘する、という調査計画をたてた。奈良県教育委員会、奈良市教育委員会と協議した結果、発掘調査は開発面積約31,500 m² のうち、まず十六坪を中心とする約11,500 m² を対象とし、調査期間は、1994年5月から1995年3月となった。

発掘調査は、最初に東一坊大路の位置を確定し、その後、十六坪をほぼ四分割して4回にわたって調査することになった。調査期間が限られていることもあって、早急に調査を開始すべきところであったが、諸般の事情により、調査が可能となったのは、5月31日であった。

最初に実施した第251次調査は、東一坊大路の位置と規模の確認を目的として、六条大路想定地の北で東西に長い調査区を設定した。この調査は、当初の予測に反して、東一坊大路想定位置において、沼状の堆積が広がっていることを確認したにとどまり、東一坊大路西側溝の位置を確定することができなかった。これが、その後の調査区の設定に少なからず影響を及ぼした。調査期間は1994年5月31日から6月21日、調査面積は約190 m² であった。

調査の概要

ひき続いて実施した第252次調査は、十六坪北東部と東一坊大路西側溝の調査である。第251次調査と並行しておこなった重機による排土が終了した段階で、調査区東辺には、第251次調査区と同様の様相を呈する個所があったが、調査区東端において東一坊大路西側溝の西岸を検出することができた。その結果、西側溝は当初設定した調査区内では収まらないことが明らかになり、また、六条大路、東一坊大路といった条坊遺構を明らかにできるのは、本調査において他にないため、調査区の拡張をすることとなった。また、東一坊大路西側溝の西で、平城京の調査では初めて、平安時代の木棺墓を検出した。調査期間は1994年6月1日から10月26日、調査面積は、拡張を重ねた結果、約4,010 m² になった。

第253次調査は、第252次調査区の南、十六坪の南東部と東一坊大路西側溝、および七条条間北小路東半の調査である。調査期間は1994年10月13日から12月27日、調査面積は約3,790 m² であった。

第252・253次調査において、当初の計画通り東一坊大路西側溝をほぼ完掘し、また、金属製人形をはじめ、琴形などの木製祭祀遺物、墨書人面土器・土馬等の土製祭祀遺物が出土し、平

城京における祭祀の良好な資料をうることができた。その一方で、坪の東半部は、建物遺構が希薄であることが明らかになった。

第254次調査は坪南西部の調査で、七条条間北小路の西半を検出するとともに、調査区南西隅を一部西へ拡張して、東一坊坊間東小路との交差状況を明らかにした。前2回の調査と異なり、遺構密度が高く、坪の東西で敷地の利用状況に違いがあることが明らかになるとともに、七条条間北小路南側溝の底において、馬骨・馬歯を納めた祭祀土坑を検出した。調査期間は1994年11月15日から1995年4月6日、調査面積は約3,600 m²であった。

第255次調査は、坪北西部の調査である。当初、坪の中心部に建つ民家を撤去して調査をおこなう予定であったが、調査期限が迫っていたため、第254次調査と並行して、民家と進入路部分を除いて重機による排土作業をおこない、可能な限り発掘することにした。本調査も遺構密度が高く、時間に追われる調査となったが、ほぼ予定の期日に調査を終了することができた。調査期間は1995年1月10日から4月6日、調査面積は約2,610 m²であった。

これらの調査で十六坪の約75%を発掘したことにより、平城京南半における坪内の様相を把握するとともに、祭祀関連の良好な資料をうることができた。5次にわたる調査面積は、計約14,200 m²であった。

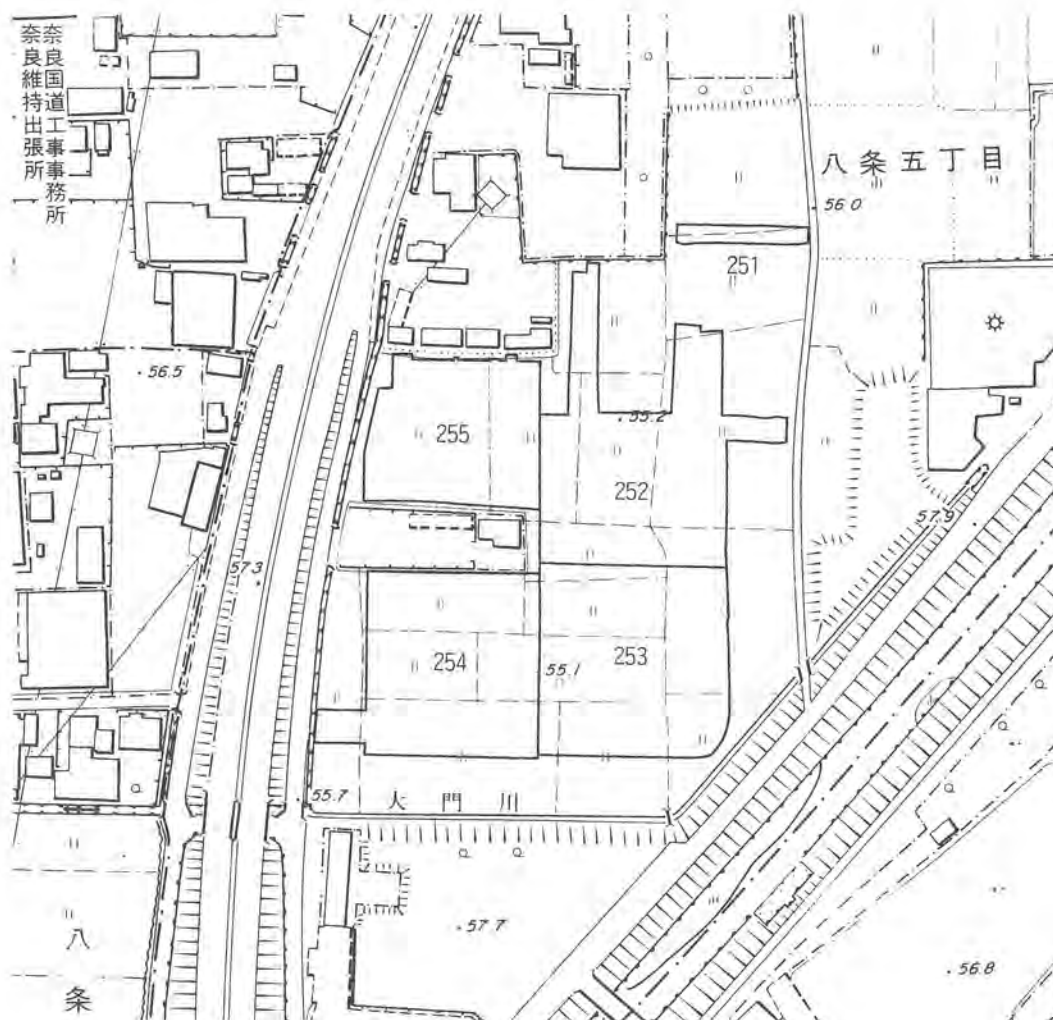


Fig. 1 調査回数と区域

2 調査地域

A 位置と環境

平城京は、東は春日山系、北は奈良山丘陵、西は矢田丘陵から派生する支丘上と中小の河川が形成する沖積地に造営されている。今回の調査地は、平城京の中央に近く、丘陵縁辺からも離れている。調査地の南東を佐保川が北東から南西に向けて流れているが、現状では、勾配がほとんど認められない平坦地といってよく、調査前は湿地状を呈していた。また、調査地の周辺部には、平城宮小子部門前に通じる東一坊大路をはじめとする、奈良時代の条坊が遺存地割として、水田畦畔にその痕跡をとどめている。

今回の主たる調査地である左京七条一坊十六坪は、北は六条大路、東は東一坊大路に面している。そこで、調査地を中心として、2条の大路に面する4坊について、過去の発掘調査の成果を概観しておくことにする。平城京における発掘調査は、従来から開発事業との関係で実施されることが多く、幹線道路の通る左京三条二坊や区画整理事業が進む右京二条三坊を中心とした一帯等では、かなりの面積の調査が進み、平城京の様相が明らかになってきている。しかし、今回の調査地は、その西に接して、奈良盆地の南北の主要幹線道路である国道24号線が通ってはいるものの、1971年にバイパスとして開通した後も、調査地周辺に開発の波が急激に押し寄せることもなく、ある程度水田が目立つ景観を呈していた。したがって、調査地の周辺における発掘調査の事例もそれほど多くはない。

調査地周辺における最初の発掘調査は、1974年に左京六条一坊二坪において実施したものである。これは、朱雀大路の調査に際し、隣接する街区の確認を目的とした小規模な調査¹⁾であった。その後、十〜十二・十四坪で発掘調査を行っているが、発掘面積もそれほど広いものではなく、十二坪における東西廂付の南北棟建物²⁾の存在が目立つ程度で、いずれも、小規模建物や建物の一部を検出したに過ぎず、具体的な状況は不詳である。なお、条坊関係としては、十・十五坪の坪境で実施した発掘調査³⁾で、東一坊坊間東小路を検出しており、両側溝心々距離約6.5mという成果をあげている。

周辺の発掘
調査事例

東に隣接する左京六条二坊は、現在、菩提川と合流した佐保川が北東から南西に流れ、それに北から菰川が合流している。六条条間路に重なるように県道が東西に通っていることもあって、4坊のなかでは、もっとも調査例が多い。そのなかで、三坪北半中央では、約1,000 m²の発掘調査⁴⁾を行っている。掘立柱建物9棟、掘立柱塀3条、井戸1基等を検出し、遺構の重複関係から、奈良時代について、4時期の変遷をたどることが明らかになっている。また、坪の東西を二分する位置に、溝、塀など、坪内を区画、あるいは分割する施設が認められなかったため、三坪は、2分の1町以上の宅地であったと考えられている。なお、この調査では、坪東辺にも調査区を設け、東二坊坊間西小路の西側溝を検出しており、その北辺で実施した調査⁵⁾でも、西側溝を検出している。なお、これらの調査で、坪の北辺、東辺における築地等の外周閉塞施設やそれに伴う雨落溝等については、いずれも確認できなかった。一方、九・十坪の調査⁶⁾では、六条条間北小路およびその両側溝を検出するとともに、雨落溝の存在から、十坪北面に

は、築地等の外周閉塞施設のあったことが明らかになっている。十四坪南西部の調査⁷⁾では、坪のほぼ4分の1近くの面積を調査し、掘立柱建物46棟、掘立柱塀9条、井戸4基等を検出し、建物の重複関係だけでみても、少なくとも3時期の変遷がたどれる。坪を東西に二分する位置に南北溝があり、その西側約4mに溝が部分的に残ることから、当初は坪内に南北道路があり、後に東側の溝だけが残し、宅地割の機能を有していたと考えられている。また、宅地内の南西隅の土坑からは、土師器皿に載せられた状態で、ガラス玉と金箔片を納めた三彩小壺2点が出土しており、宅地全体の地鎮のために埋納したと考えられている。

左京七条一坊では、九坪の南西部における調査⁸⁾で、掘立柱建物5棟、掘立柱塀2条、南北溝1条、井戸1基を検出し、井戸からは、奈良時代中頃から後半の土師器・須恵器とともに斎串、銅鈴、漆紙文書の断片等が出土した。また、十一坪の西端における調査⁹⁾では、東一坊坊間路東側溝と坪の西面を区画すると考えられる掘立柱塀を検出している。

左京七条二坊では、六坪のほぼ中央における調査¹⁰⁾で、掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、井戸2基等を検出した。2基の井戸からは、土師器、須恵器とともに、唐三彩片と斎串が出土している。また、十一坪の南半で約1,000 m²の調査¹¹⁾を行っているが、沼状の堆積を確認したのみで、奈良時代の遺構・遺物は残っていなかった。

以上、比較的顕著な遺構を検出した調査を中心に、調査地周辺の発掘調査の概要を記してきたが、発掘調査は約20件、面積にして計約8,700 m²で全体の1%にも満たない状況である。出土遺物には、注意をひくものがあるとはいえるものの、調査面積も狭いものが多く、また、坪内の一部を調査したにすぎないこともあって、宅地の規模等は、ほとんど明らかになっていないのが現状である。また、これらの調査で検出した掘立柱建物も、その規模を明らかにしえなかったものが多いが、そのなかで最大のものは、身舎が2間5間で廂付、柱間は8尺程度である。これが平城京南半における最大規模の建物として一般的であったのであろうか。このような状況の下、広大な面積を対象とした発掘調査を行うことにより、上述したような問題を解決する手がかりを得るとともに、平城京南半の具体的な様相が明らかになるものと期待された。

1) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974 pp. 7・8

2) 奈良市教委「平城京左京六条一坊十二坪の調査」『奈良市概要昭和58年度』1984 pp. 42・43

3) 奈良市教委「平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査 第139次」『奈良市概要昭和62年度』1988 p. 49

4) 奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪発掘調査報告」『奈良市概要昭和56年度』1982 pp. 45—52

5) 奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪の調査」『奈良市概要平成3年度』1992 pp. 68・69

6) 奈良市教委「平城京左京六条二坊九・十坪の調査」註2) 前掲書 1984 pp. 44—47

7) 檀考研「奈良市平城京左京六条二坊十三・十四坪発掘調査概報」『奈良県概報1987年度』別刷 1988 pp. 1—18

8) 奈良市教委「平城京左京七条一坊九坪の調査 第128次」『奈良市概要昭和62年度』1989 pp. 21—25

9) 奈良市教委「平城京左京七条一坊十一坪（東一坊坊間路）の調査」註2) 前掲書 1984 pp. 71—73

10) 奈良市教委「平城京左京七条二坊六坪（第93次）の調査」『奈良市概要昭和60年度』1986 pp. 31—35

11) 奈良市教委「平城京左京七条二坊十一・十二坪の調査」註2) 前掲書 1984 p. 70

B 地区割と測量

地区割 地区割は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1989年度から採用している平城宮・京の発掘調査地区割¹⁾に従った。今回の調査区域には東一坊大路と六条大路の交差点が入るため、大地区で4地区、中地区で8地区にわたる。地区割と各調査区の関係は Fig. 2、各中地区の基準座標値は Tab. 2 の通りである。

測量 奈良市教育委員会が1980・81年度に設置した、奈良市埋蔵文化財発掘調査測量用基準点の17番辰市小学校から柏木三等三角点に結合するトラバースを組み、調査地域およびその周辺に、発掘調査の基準となる多角点を7点設けた。トラバース測量の路線長は2,355.283 m、角閉合差23″、水平位置の閉合差は26 mm、閉合比は1/89,000であった。調査区域内に設けた3点の高さは奈良市水準点4から、直接水準測量で求めた。

これらの成果に基づき、遺構の平面および高さの実測を行った。第251次調査はトータルステーションを用いた手計りで行ったが、第252次調査から第255次調査までは航空写真測量で行い、航空写真測量後に検出した遺構などの実測は、第251次調査と同様の方法で行った。なお、補足測量の高さの測定には、水準器から直接に標高数値を読みとれる標高換算式標尺を用いた²⁾。

航空写真測量

標高換算式標尺

航空写真測量での撮影では、ヘリコプターに搭載した航空写真測量用カメラを使用し、1/200～1/400の垂直写真を、すべてネガカラーフィルムで撮影した。使用したカメラのレンズの焦点距離は主として210 mmであったため、撮影高度はおよそ42～84 mであった。各撮影の日時等は Tab. 1 の通りである。図化では当研究所のデジタルタイプの解析図化機(WILD-AC3)と互換性のある機種を使用し、縮尺1/200の写真を用いて縮尺1/20でデータ採取を行い、縮尺1/50、1/100、1/200の平面図を作成した。なお、図面の校正は、空撮後の断ち割り調査の結果、遺構カード、日誌、写真等を用いて行った。各調査の遺構図が完成した段階で、それらを合わせた編集図を作成した。この段階で手計りで実測した第251次調査の実測図、第252次調査の六条大路南北両側溝ならびに東一坊大路の西側溝の完掘後の実測図も入力した。

図化縮尺

Tab. 1 航空写真撮影一覧

次数	撮影年月日	フィルム種別	写真縮尺	写真枚数
252	1994. 9. 8	カラー	1/500	1
			1/200	23
253	1994.12.15	カラー	1/500	1
			1/200	13
254	1995. 2. 22	カラー	1/500	1
			1/250	10
255	1995. 3. 23	カラー	1/500	1
			1/200	11

1) 奈文研「平城宮・京の発掘調査地区割り」『1989年度平城概報』1990 pp. 2-6

2) 奈文研「発掘調査支援機械システムの試作研究」『年報1995』1996 p. 35

Tab. 2 調査次数と中地区との関係 (X, Y 座標値は国土方眼座標系第VI系に基づく)

中地区名	Aライン (X)	10ライン (Y)	調査次数
6AHH-G	-148,314.000	-18,054.000	253 254
6AHH-H	-148,254.000	-18,054.000	252 253 254 255
6AHH-I	-148,194.000	-18,054.000	252 255
6AHD-A	-148,143.000	-18,054.000	251 252
6AHG-P	-148,314.000	-17,790.000	253
6AHG-Q	-148,254.000	-17,790.000	252 253
6AHG-R	-148,194.000	-17,790.000	252
6AHC-J	-148,143.000	-17,790.000	251

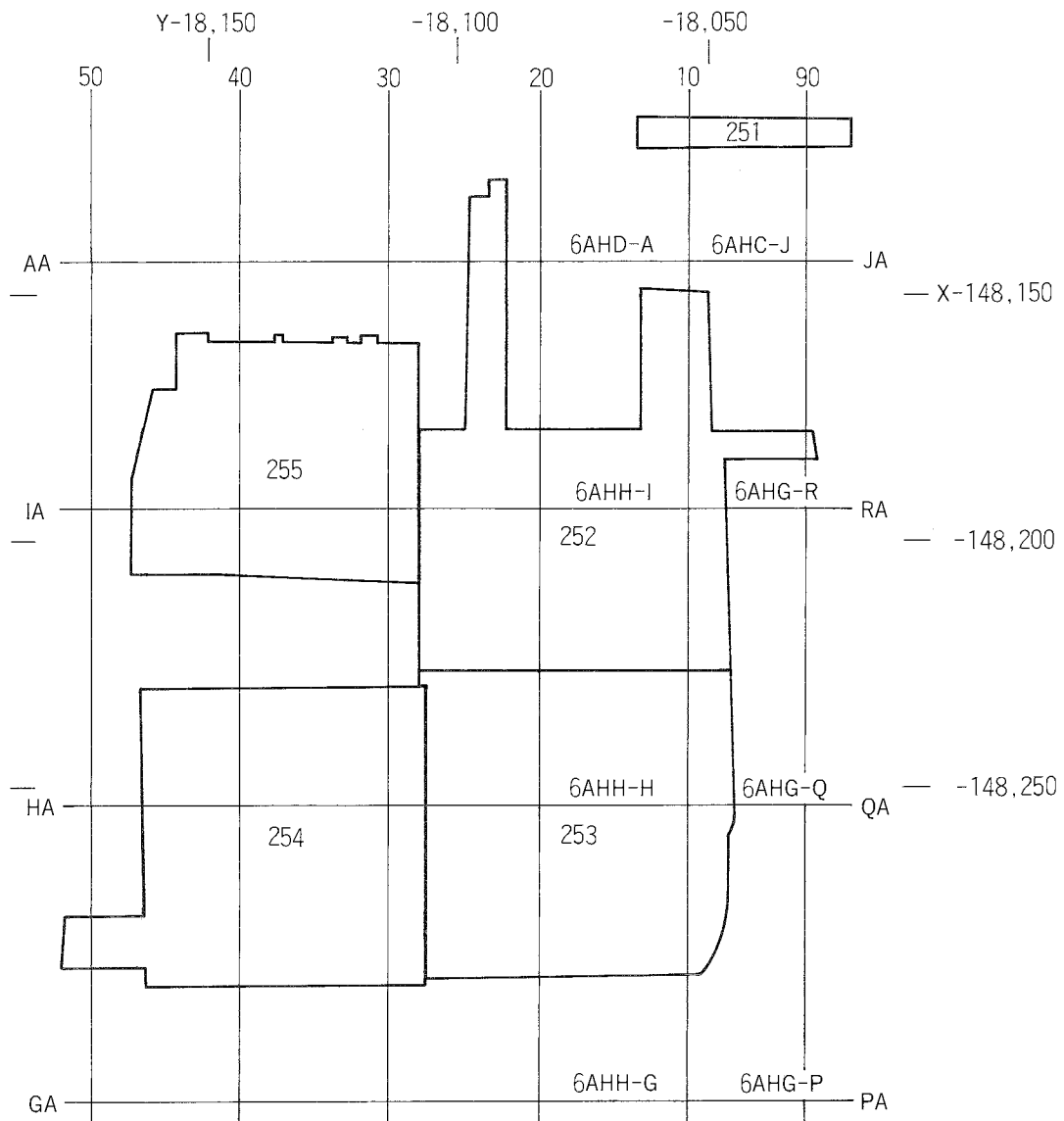


Fig. 2 地区割図

3 調査の概要

今回の調査は、左京七条一坊十六坪を中心とする約31,500 m²を対象として、約10ヶ月間5次にわたって実施した。調査面積は、計約14,200 m²、検出した奈良時代以降の主な遺構は、建物58棟、堀49条、井戸11基、土器埋納遺構5基、祭祀土坑1基、溝15条、道路4条および両側溝等であり、このほか、古墳時代の竪穴住居址と平安時代の木棺墓を検出した。遺物としては、東一坊大路西側溝を中心に、木簡、瓦埴類、土器、土製品、木製品、金属製品、石製品等が出土した。

A 第251次調査

東一坊大路の位置と規模を明らかにするために、六条大路想定位置の北(6AHC-J区、6AHD-A区)で実施した調査である。東西に長い調査区を設定したが、後世の沼状の堆積が広がっており、東一坊大路とその東西両側溝は遺存していなかった。

B 第252次調査

左京七条一坊十六坪の北東部、及び東一坊大路、六条大路(6AHD-A区、6AHG-Q・R区、6AHH-H・I区)の調査である。東一坊大路と六条大路の位置と規模が明らかになるなど、平城京の条坊に関して一定の成果を得たのであるが、坪内の遺構密度は希薄であった。

検出した遺構は、東一坊大路、六条大路およびそれらの両側溝のほか、掘立柱建物8棟、掘立柱堀3条、井戸1基等である。遺構の重複関係は、3棟の建物をそれぞれ同位置、あるいは近接した位置で建て替えていることが確認できたに過ぎず、遺構に伴って出土した遺物も少なく、遺構の変遷や時期を知る手がかりは乏しかった。わずかに、調査区南辺で検出した2間5間の東西棟建物が、坪東半を東西二等分する位置にあり、中心的建物群を構成する可能性が考えられた。なお、坪を南北にほぼ二等分すると考えられる位置には、東西溝SD6430があるが、坪東端まで達しておらず、また、途中で溝が途切れ、通路状の遺構SX6429があるので、宅地内の区画溝、あるいは地割溝になると考えられた。

東一坊大路については両側溝心々距離22.5 mであることが明らかになり、その西側溝は、奈良時代末に一度掘り直しているが、過去における上流部分の調査と同様に幅約8 mと規模が大きく、平城京内の基幹排水路にふさわしいものであった。出土遺物には、木簡をはじめ、金属製人形や木製形代、人面墨書土器、土馬等の祭祀関連遺物や鑄造関連遺物がある。特に、鉄製人形の出土は、従来例が少なかつただけに注目されるであろう。西側溝は、その後、規模を縮小しつつも、平安時代にいたっても、溝として機能しており、最後は水田の用水路となっていたことが明らかになった。十六坪の北から1/3付近では、西側溝に架かる橋状遺構を検出した。時期を決定しえなかったが、大路側溝に架かる橋とすると、十六坪の性格とも関わる可能性があり、今後の坪内の調査が注目された。

一方、六条大路については、初めてその両側溝を併せて調査した。当初想定していた位置より北で検出したのであるが、両側溝心々距離が14.3 mで、従来知られている他の大路より狭い

東一坊大路
西側溝

六条大路

ことが明らかになった。平城京の条坊研究に新たな資料を加えることができたのであるが、同時に新たな問題も提起することとなった。

木 棺 墓 なお、東一坊大路西側溝の西岸近くでは、平安時代の木棺墓を検出し、銅銭（承和昌寶）や漆器を含む豊富な副葬品からその年代が推定でき、平城京廃絶後の土地利用の一端をうかがうことができた。このほか、六条大路の路面上では土器埋納遺構 1 基を検出し、東一坊大路の路面上では古墳時代の竪穴住居址を検出した。

C 第253次調査

第252次調査区の南、十六坪南東部と十五坪北辺東半（6AHG—P・Q 区、6AHH—G・H 区）の調査で、条坊関係では、ひき続き東一坊大路西側溝を調査するとともに、七条条間北小路と南北両側溝の東半を調査した。

東一坊大路西側溝は、今回の調査で、当初の計画通り 1 坊分を発掘することができた。出土遺物には、第252次調査と同様、大量の木簡、木製品、金属製品、土器・土製品等がある。

七条条間北小路は、従来知られている小路の規模の範疇に収まるものであったが、六条大道路路心から推定される位置より南で検出した。その結果、道路心々距離は条坊計画寸法より長い460尺ほどになり、第252次調査で検出した東西溝 SD6430は、道路心々間を南北にほぼ二等分する位置にあることが判明した。

坪内では、掘立柱建物 8 棟（内 2 棟は第252次調査と重複）、掘立柱塀 3 条を検出したが、第252次調査と同様、建物遺構の密度は高くなく、調査区南西部と北東部には、広い空間がある。第252次調査区南辺で検出した東西棟建物は、南に廂を伴うことが判明し、建て替えに際して南廂を廃していることが明らかになった。その南にはほぼ同規模の南廂付きの東西棟建物 SB6500が建ち、さらに小規模ながら脇殿風の南北棟建物（SB6490・6495）もあり、これらが、十六坪東半における中心的建物群を構成していることが明らかになった。また、井戸も、坪北東部の 1 基のみであることから、少なくとも十六坪東半は一体で利用していたと考えられた。また、南辺に門になると考えられる遺構 SX6475を検出したことにより、外周閉塞施設の存在を想定しうようになった。

坪東半の中心的建物群

一方、十五坪は、北辺を調査したに過ぎず、掘立柱建物の一部を検出したのみであった。調査区西端近くでは、七条条間北小路南側溝の幅を狭くしている部分（SX6473）があり、板を架け渡して橋とした可能性がある。このように、本調査により、それぞれの坪への出入りに関する手がかりを得ることができた。

なお、七条条間北小路との交差点に近い東一坊大路路面上の西側溝東岸に近接する位置で 2 基、西側溝西岸近くで 1 基、それぞれ土器埋納遺構を検出した。

D 第254次調査

第253次調査区の西、十六坪南西部と十五坪北辺西半（6AHH—G・H 区）の調査で、第253次調査にひき続き、七条条間北小路の西半を調査するとともに、七条条間北小路と東一坊坊間東小路の交差点を調査し、東一坊坊間東小路東側溝に架かる橋を検出した。

これまでの東半の状況とは一変して、遺構密度が高く、十六坪内では、掘立柱建物19棟（内 1

棟は第253次調査と重複)、掘立柱塀19条、井戸1基等、十五坪内では掘立柱建物4棟(内1棟は第253次調査と重複)、掘立柱塀2条等を検出した。十六坪の遺構変遷については、遺構の方位の振れ、重複関係、位置関係などから4時期(その後の検討の結果、本報告では6時期に区分している)に区分することができた。加えて、本調査で、十六坪の約6割近くを調査したことになり、敷地の利用形態や性格等について、検討しうようになった。

坪を東西に二等分する位置で検出した南北掘立柱塀は、南端近くに柱間の広い個所があり、坪南半については、そこを通路として東西で使い分けていたと考えられるにいたった。調査区北西部には廂付の掘立柱建物群があり、十六坪西半の中心がここにあったと見られ、さらに、総柱建物の倉庫や貯蔵施設と見られる建物の存在から、整然とした建物配置をとる南東部に対して、南西部は日常生活をまかなう厨的空間と位置づけた。一方、建物や塀の位置から、十六坪南辺には、築地等の外周閉塞施設が存在しない時期のあることも明らかになった。また、調査区南東部では刳抜井戸を検出し、その出土遺物から、調査地においては、平安時代まで活動が及んでいたことが判明し、第252次調査の木棺墓とともに、平城京廃都後の状況を知る手がかりを得ることができた。

坪内は東西
で使い分け

本調査においても、七条条間北小路と東一坊坊間東小路の交差点において土器埋納遺構1基を検出した。また、東一坊坊間東小路との交差点近くの七条条間北小路南側溝の底で、祭祀土坑 SX6530を検出した。これは側溝に水がない段階で掘り、馬歯、馬骨、墨書人面土器などを納めたものである。このような祭祀は、平城京では、従来知られていなかっただけに注目されるであろう。なお、北側溝のほぼ同位置にも同様な土坑を検出したが、こちらからは顕著な遺物の出土はなかった。

祭 祀 土 坑

E 第255次調査

十六坪北西部(6AHH-H・I区)の調査である。検出した遺構は、掘立柱建物21棟、掘立柱塀10条、井戸3基等で、遺構の重複関係等、遺構変遷を知る手がかりが少なかったが、第254次調査の成果にしたがい、建物の位置関係等から4時期に区分された。

調査区の関係で、第252次調査検出の坪を南北にほぼ二等分する位置にある東西溝 SD6430の有無を確認することはできなかった。一方、第254次調査で検出した坪を東西に二等分する位置に設けられた南北掘立柱塀は、坪の北半には及んでいないことが判明した。さらに、調査区北東隅で検出した南北廂付東西棟 SB6630が坪を東西に二等分する線上に位置し、区画施設等を検出していないことから、北半についても、一体の敷地利用と考えられ、十六坪は奈良時代を通して、1町の敷地利用であることが明らかになった。坪北西部は、この南北廂付東西棟とその西に並ぶ東西棟 SB6635を除くと、比較的小規模な建物を雑然と配置しており、十六坪の主要な建物群は、やはり南東部にあることが明らかになった。

I 町 占 地

最後に、第252次調査の北西拡張区で検出した十六坪北面築地の雨落溝 SD6446は、調査区北辺中央付近で途切れることが判明した。西方については削平された可能性も考えられたが、雨落溝が想定される個所において、溝と重複する、あるいは併存しがたい位置で掘立柱建物を検出していることから、外周閉塞施設が存在しない時期も考えられ、今回の調査区では解決しえなかった。

4 調査日誌

A 第251次調査

6AHC—J区、6AHD—A区
1994年5月31日～6月21日

5・31 調査区(東西43 m・南北6 m)を設定し、重機による表土、耕土、床土の除去をはじめる。

6・1 排水溝を掘りはじめる。調査区北側にも水抜き用の溝を掘る。

6・2 地区杭を打つ。

6・3 排水溝を掘り終わる。調査区四壁の整形後、西側から遺物包含層(黄灰土層)を除去し、遺構検出にかかる。

6・6 調査区の西端部では、遺物包含層の下は砂と粘土の堆積層になる。遺物は南北溝で取り上げたが、溝ではなく、また、道路と想定された部分は、沼状の堆積である可能性が高くなる。

6・7 排水溝をさらに掘り下げると、地山に達しない。とりあえず、沼状堆積層の北半部について部分的に掘り下げはじめる。遺物は灰色土として取り上げる。道路側溝は存在しない可能性がでてきた。JI 88区で土坑状の穴を検出する。

6・8 沼状堆積の範囲は、11ライン付近から89ライン付近に及ぶ。JI 90～91区付近には、さらに下層の堆積層があり、灰色土下層と命名する。JI 88区の土坑状の穴を掘りはじめる。

6・10 調査区北壁断面で、93・94ライン付近に2条の溝状の堆積を確認。これの検出面を暗青灰土とする。

6・14 暗青灰土層を掘り下げたところ、94ライン付近で、沼状遺構の底で斜行溝(SX6403)を検出。JI 88区の土坑は野井戸(SE6401)のようである。掘り下げ後、写真撮影。

6・15 昨日検出した斜行溝の東で、もう1条の斜行溝(SX6404)を検出。遺構検出終了し、午後から写真撮影と平面実測。

6・16 平面実測終了し、土層図作成にかかる。

6・17 土層図作成終了。

6・21 砂入れして、調査終了。

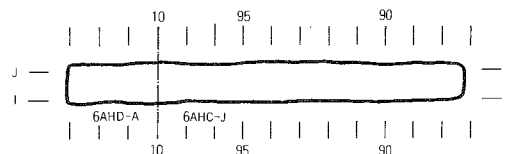


Fig. 3 第251次調査区遺構略図

B 第252次調査

6AHD—A区、6AHG—Q・R区、6AHH—H・I区
1994年6月1日～10月26日

6・1 第251次調査区にひき続き、第252次調査区、第253次調査区を併せて、北東から重機による表土、耕土、床土の除去をはじめる。

6・2 調査区の東限を一応11ラインとする。これで、第252次調査区は東西50 m・南北48 m、第253次調査区は東西50 m・南北63 mとなる。重機による排土は、湧水が多く難航する。事業地全域の排水と並行して進めることにする。

6・14 調査区西側の排水溝を掘りはじめる。

6・15 地区杭を打つ。

6・29 第252次調査区、第253次調査区の排水溝を掘り終わる。

6・30 西から遺構検出。南半には遺構らしきものがあるが、北半は何もない。

7・1 現場班交代し、ひき続いて25～26ライン間までの遺構検出をするが、遺構密度は極めて低

い。東西畦の北は暗灰土の混じる灰色砂質土であるが、南は黄褐土が多い。ともに所々に下層の青灰砂質土がでている。5条の溝を検出したが、いずれも耕作溝であろう。

7・4 梅雨明け宣言あり。HJ24区、HJ25区において小柱穴を5個検出する。東西溝数条があるが、他に顕著な遺構はみられない。

7・5 HQ24区、IB24区で柱穴を検出する。それぞれ、これらを西妻とする梁行2間の東西棟掘立柱建物になりそうである。

7・6 昨日検出の柱穴は、それぞれ桁行3間の東西棟(SB6435・SB6440)としてまとまった。一部小穴が柱穴に重なりはじめる。

7・7 IA21～IC21区で、南北に並ぶ柱穴3個を検出する。I地区の掘立柱建物(SB6440)は東に廂を伴うのであろうか。調査区南端近くでも、

21・22ライン付近で柱穴5個を検出し、東西棟になりそうである。ID21区では、径2.7mの土坑を検出する。

7・8 20ラインまで遺構検出。昨日、調査区南端付近で検出した柱穴の続きを検出する。

7・11 H地区の掘立柱建物は、一部が南北畦にかかる4間目の柱穴を検出する。

7・12 H地区の掘立柱建物は、18ライン西で東妻を検出し、2間5間の東西棟(SB6426)でまどまる。南東隅の柱抜取穴には、土器が入っている。調査区西端から続いていたNライン北の東西溝(SD6430)は、18ラインまでは延びていない。HS19区からIC18区ぐらいまでは、遺構検出面が、西側は灰色砂質土層、東側は茶灰褐土層と違いがある。

7・13 本日より、作業を分け、遺構のチェックもはじめる。西から26ラインまでを精査する。N

ライン北の東西溝(SD6430)を18ライン東で再び
検出し、この溝が18ラインでいったん途切れるこ
とが判明する。この溝は、坪を南北に二分する想
定位置に近い。

7・14 14～15ライン間で、東側が一段落ちる。
東一坊大路西側溝の堆積が広がっていると考え、
南北大溝と命名する。これの範囲を確認するた
め、東西畦の南で試掘したところ、この堆積は、
調査区内では取まらないことが判明したので、調
査区を東に拡張することにする。

7・15 西側のバルコンは、午後電圧低下のため、遺構精査ができず。東側では、昨日検出した南北大溝の輪郭線を確定するとともに、堆積層の暗灰粘質土を一部下げはじめる。

7・18 調査区を東に拡張するため、第253次調査区の新東隅より、重機による排土をはじめる。一部試掘したところ、遺構検出面から1.3 mほどは

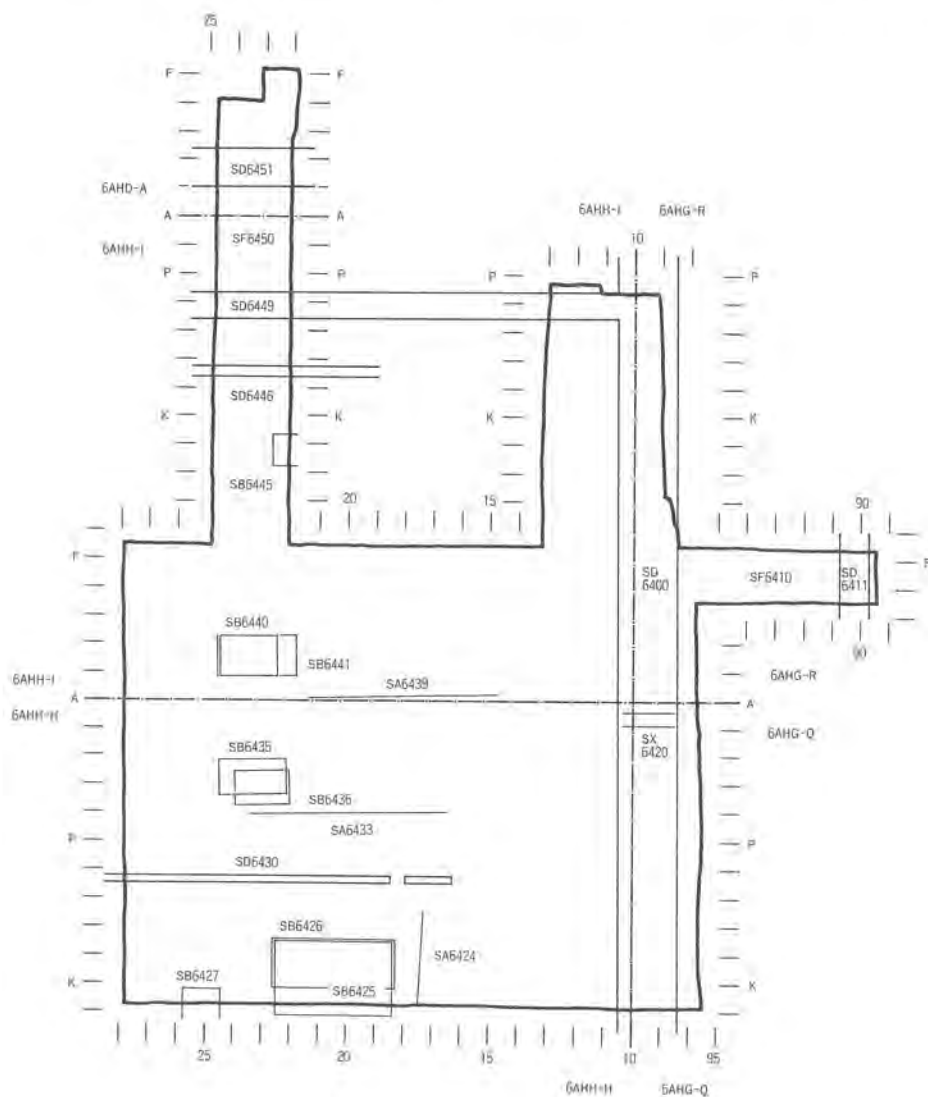


Fig. 4 第252次調査区遺構略図

暗灰色の粘質土が堆積する。HM13の地区杭の南と東に埴、石が集中する。HO～HS区の12ラインと13ラインの中間で、南北に一本線が通る。ここから東が西側溝になるのであろうか。

7・19 調査区の東への拡張は、11ラインから東4 mまでとし、重機による排土は本日で終了する。さらに、調査区北端では、東側溝を検出するため、8 m幅で東へ26 m拡張することにする。

7・20 遺構検出は、当初設定した調査区の東端(11ライン)に達する。南北大溝の暗灰粘質土層を掘り終わり、その下の灰黄粘質土の掘り下げをはじめ。重機による東拡張区の排土は、本日1日で終了。

7・21 東拡張区に続き、六条大路の位置と規模を確認するため、重機による北西拡張区(東西8 m・南北46 m)の排土にかかる。

7・22 調査区東端近くの灰黄粘土層から、奈良末～平安の土器が出土。この層の下に奈良時代の遺構があると考えられる。東一坊大路西側溝の西岸は、偶然にも、当初設定した調査区の東排水溝とほぼ一致するようである。北西拡張区に続き、西側溝と六条大路南側溝との合流部を確認すべく、重機による北東拡張区(東西11 m・南北20 m)の排土にかかる。

7・25 北東拡張区、東拡張区の地区杭を打つ。南北大溝は灰黄粘土層の下の暗茶灰粘土層の掘り下げをはじめ。

7・26 西側からの精査は22～23ライン間まで到達する。22～24ラインで、東西畦をまたぐ掘立柱建物(SB6436)を検出。東でやや北に振れる。HP24区付近では、黄灰土の下の整地層である灰褐土層を取りはじめる。

7・27 遺構精査で検出した調査区南西部の「コ」字状溝(SD6431)を掘る。柱穴の精査をした結果、調査区南端の東西棟については、新旧2時期(SB6425・SB6426)あることが判明する。

7・28 東西畦の南で南北大溝を試掘したところ、東に拡張したにも関わらず、溝が収まらないことが明らかになったので、北東拡張区と合わせ、東にさらに5 m拡張することにする。調査区南端の掘立柱建物(SB6426)について、抜き取りも含め、新旧柱穴の重複関係を検討する。輪郭が決定したものから掘り下げはじめる。

7・29 北西拡張区の排水溝を掘り、東西の壁で溝を検出する。重機による排土終了。

8・1 東拡張区の排水溝を掘る。西からの精査は18ラインの東まで。北西拡張区での知見に基づき、北東拡張区をさらに北に拡張すべく、重機で排土する。北は $X = -148,149.5$ としたが、明日さらに50 cm北へ延ばす予定。

8・2 坪南北二分の一溝(SD6430)の途切れる

部分の北に柱穴2個を検出する。出入口になるのであろうか。東拡張区では、90ラインの東西で、東一坊大路東側溝の両岸を検出。幅約3 m。西側溝東岸も確認し、東一坊大路は側溝心々で約23 mとなる。北東拡張区の重機による排土。北限を $X = -148,149$ とする。

8・3 Nライン北の区画溝(SD6430)は、16ライン近くでなくなる。東拡張区の東一坊大路東側溝の堆積土を半スコさげる。遺物は東側溝青灰粘質土で取り上げる。東一坊大路の路面上に方形の遺構を検出。埋土は黄灰粘土。竪穴住居址になるのかもしれない。北東拡張区は、重機排土と並行して、東西に排水溝を掘る。東辺の再拡張(11ラインから東へ10 m)は、第253次調査区南端から重機による掘削を開始。西側溝は、当初調査区の北端部(Fライン北)で、試掘したところ、砂質気味の粘土(後に、灰色粘土層と褐色砂に分層)の下は、青灰粘土層、茶灰土(木屑層)と続くことが判明する。

8・4 西からの精査は13ラインまで到達する。東拡張区では、東側溝を掘り下げる。西側溝は、東岸の検出とFライン北の東西畦の土層図作成。

8・5 東拡張区は東側溝、竪穴住居址の土層図作成と地上写真撮影。東辺の拡張では、第253次調査区の東西畦予定地(Aライン)の北側で試掘し、西側溝の東岸を確認。その深さまで、重機で掘削することにする。ただ、第253次調査区の南半では、西側溝東岸は、拡張部の東になるようである。基本的には、溝を掘り上げることを目的とするが、排土が近接して危険なため、重機で可能な限り排土を東に移動することにする。

8・8 北東拡張区では、重機で拡張区を整形するとともに、排水溝掘りと並行して、遺構検出をはじめ。HP14区の井戸(SE6432)は、南半を掘り下げはじめる。14ライン東、南北大溝の上部堆積土は灰褐砂土とする。

8・9 北東拡張区では、Mラインから北が六条大路南側溝になるようであるが、拡張区内では、北岸が確認できない。IK12区で埋土に土器を含んだ土坑(SK6423)を検出する。

8・10 HP14区の井戸(SE6432)の掘り下げを続けたところ、一辺約90 cmの縦板組の井戸枠を検出する。六条大路南側溝と東一坊大路西側溝の関係を検討するため、土層観察用に畦を残すことにする。また、南側溝の北岸を検出するため、北東拡張区を北に拡張することにする。

8・11 六条大路南側溝の北岸は拡張しても確認できず、北東拡張区の西端を重機で北へさらに3 m拡張する。西側溝西岸は、13ライン東に、南北でいくつもの土の違いがあり、複雑な状況を呈している。西側溝では、堆積が西に広がるHL11区の北西に土層観察用の畦を残して掘る。畦の南側

は、幅40 cm 程度の溝となった。

8・12 西側溝西岸の検出作業。拡張した本調査区東壁の整形。

8・16 西側溝は96ライン付近で東岸が確定し、東西畦の南では、掘り下げをはじめ。北東拡張区では、南側溝北岸は再拡張しても確認できず。さらに、北に拡張することにする。

8・18 西側溝堆積土の灰黄粘土層、灰色粘土層のうち、上層の灰黄粘土の除去を続ける。北東拡張区では、上層の暗茶灰粘土を除去した後、下層の灰色粘土層を掘り始める。IK12区の土坑(SK6423)の写真撮影。

8・19 西側溝灰黄粘土層の掘り下げ。北東拡張区では西排水溝を掘る。

8・22 西側溝灰黄粘土層の掘り下げ。IL10区から瓦器が出土。北東拡張区では、暗茶灰粘土層に続き、灰色粘土層の除去。東西畦のうち、西側溝にかかる部分はずし始める。

8・23 西側溝灰色粘土層の掘り下げ。灰色粘土を除去すると、テラス状の平坦面が現れ、そこで溝幅が狭くなり、そこから再び傾斜を強めて落ち込むようである。北西拡張区の六条大路南側溝でも、ほぼ同様の状況が窺え、Nライン南45 cm の位置で、2 段目の落ちを検出する。

8・24 HL11~HL13区に設定した東西畦で、珪藻分析・花粉分析のための土壌サンプリングをおこなう。西側溝では灰色粘土層の掘り下げを続ける。IK12区の土坑(SK6423)の掘り下げを再開する。上半部より布目痕跡のある漆膜片が出土。

8・25 西側溝は、灰色粘土層の掘り下げ。調査区南端のQJ97区で、杭・横木・人頭大の礫からなる東西方向のしがらみ(SX6452)を検出。ここで、溝は東へ曲がる。11世紀代の瓦器が出土する。東西畦から北は、灰色粘土層の除去が東岸まで達する。IK12区の土坑(SK6423)の埋土は、昨日までが土坑1、本日から下層部分を暗灰粘質土とし、遺物を取り上げる。また、土坑中央に東西畦を設け、そこで地区を南北に分けることにする。

8・26 西側溝灰色粘土層の掘り下げは、北東拡張区を除き、ほぼ終了する。溝は用水路の様相を呈しており、それが調査区南端で堰き止められて、東へ流路を変える。これが、11世紀頃の西側溝の姿であろう。西側溝から東へ支流が分岐する地点では、溝底がやや深くなり、灰色粘土が比較的厚く堆積している。北東拡張区の西側溝灰色粘土層の除去を再開。IK12区の土坑は、底が近づくにつれ、遺物が少なくなる。

8・29 北東拡張区では、西側溝灰色粘土層を掘り下げる。東へ達し、折り返しも灰色粘土で遺物を取り上げる。

8・30 北東拡張区の土坑(SK6423)、西側溝しが

らみなどの写真撮影。北東拡張区では、西側溝灰色粘土層の除去。北西拡張区にベルコンを並べる。

8・31 北東拡張区の西排水溝をX=-148,138.8 まで重機で北へ延長し、六条大路南側溝の北岸を探す。標高53.6 m 付近の砂層を追うが、砂層が続いたままである。

9・1 北東拡張区では、RH~RJ ライン間で、西側溝の支流が西にのびる。北西拡張区では、遺構検出面までを本調査区と同様、黄灰土として遺物を取り上げるが、IM ライン以北は、遺構検出面が一段下がり、その上には、灰色の粘質土が堆積している。AC~AD ラインの中央以北は、灰色粘土層をはずすと粗砂になる。

9・2 北東拡張区のIK12区の土坑(SK6423)と西側溝から西へ広がる溝(SD6421)を完掘する。

9・5 北西拡張区では、一段高いIM ラインの南で遺構検出。IP ラインで東西に線がつくが、その北側の土層の判断がつかず、下げきれない状況である。排水溝で確認した東西溝が六条大路南側溝とすると、路面推定幅から、北側溝が拡張区内に収まらないことも考えられたため、北端の東半を約3 m、重機で拡張する。

9・6 空撮用の対空標識打ち。北西拡張区では黄灰土層をはずす。北側溝は、A~C ライン間で灰色粘質土が広がり、判断に苦しみ。南側溝は、東壁では浅い窪みしかなく、その下には、溝とは考えにくい土坑がある。西から南側溝埋土黄褐土として掘り下げる。北側溝では、灰色粘質土層の下に暗灰シルト層で合わせ口甕棺を検出する。

9・7 北西拡張区では、北側溝暗灰シルト層、南側溝黄褐土層の排土。脂肪酸分析のため、土器埋納遺構(SX6448)の土壌を採取。

9・8 空撮後、ひき続き地上写真撮影。

9・9 地上写真撮影。北西拡張区は、北側溝暗灰シルト層の下に暗灰砂質粘土層、暗灰粘土層の掘り下げ。その下は灰黒粘土層となる。土器埋納遺構は、実測後、土器を取り上げる。東拡張区北壁の土層図作成。

9・12 本調査区の北壁、西壁の排水溝を掘り下げ、土層図の作成にとりかかる。北西拡張区では北側溝灰黒粘土層の排土。灰褐砂で底になる。北側溝の底では、これに先行する溝が、北西から南東に斜行する。南側溝は茶灰シルト層を除去したところ、灰色粘土を埋土とする東西溝を検出。東壁では土坑とみていたが、南側溝を掘りなおした溝であることが判明した。

9・13 北西拡張区では、南側溝の掘り下げ後、写真撮影。北東拡張区では、南側溝と西側溝の支流(SD6421)の掘り下げをはじめ。遺物は、青灰粗砂として取り上げる。一部の柱穴の断ち割りを始める。土層図作成のため、南北畦の東側を1

スコ下げる。

9・14 昨日に続き、北東拡張区の掘り下げを続ける。北西拡張区では、雨落溝の深さを東壁で確認。南側溝の掘り下げ終了。建物群の柱穴の断ち割りにかかる。東西畦にかかる建物(SB6435)には柱根が残っており、建物群のみ平面実測することになる。

9・19 北西拡張区では、雨落溝を掘りきる。調査区南端の掘立柱建物(SB6425・SB6426)は、断ち割りの結果、新旧関係が逆転するものがあり、柱穴の組み合わせが問題になる。土層図作成のため、東西畦の際を掘り下げる。

9・20 北東拡張区では、西側溝を掘る。J～Mラインでは、青灰細砂層を、IH・II区の10～12ラインでは青灰細砂層の下の暗灰粘土を掘る。北西拡張区では、雨落溝、南側溝の写真撮影。南の柱穴の断ち割り。調査区南端の掘立柱建物の柱穴の断ち割り。

9・21 北東拡張区の掘り下げと並行して、柱穴の断ち割りを続ける。畦土層図の作成。

9・22 北西拡張区は平面実測。II22～II22区で建物(SB6445)の西妻を検出する。北東拡張区は、西側溝灰色粘砂層の掘り下げ。木簡、一本歯の下駄、刀子等が出土。HP14区の井戸(SE6432)の掘り下げるの準備にはいる。

9・26 柱穴の断ち割りと土層図作成のため掘り下げた畦際の埋め戻し。北西拡張区では、平面実測終了。北東拡張区では、西側溝暗灰砂層の掘り下げ。東側では、木屑層がでているが、中央では薄い。木屑層の下は粗砂になる。南側溝部分は、暗灰粘土、青灰粗砂として掘り下げる。

9・27 HO13区で木棺墓(SX6428)を検出。北東拡張区では、南側溝部分は灰色粘砂、西側溝部分は暗灰砂として掘り下げる。暗灰砂層には、土馬、硯の他に、8世紀後半から10世紀の墨書土器が含まれる。

9・28 西側溝は、灰色砂粘層、暗灰砂層の掘り下げ。動物遺存体等が出土する。木棺墓には、銭、漆箱、須恵器平瓶等が副葬されている。土器は奈良時代より新しい。現地説明会の準備。

9・29 北東拡張区では、西側溝暗灰砂層の掘り下げを続ける。II11区で、曲物を埋設した取水遺構(SX6422)を検出する。現地説明会の準備。

9・30 西側溝は、昨日に引き続き暗灰砂層の掘り下げ。HP14区の井戸(SE6432)の写真撮影。木棺墓は、畦を残し棺輪郭部内側の落ち込み部分を掘り下げ、遺物を出して写真撮影。その後、平面と断面の実測。現地説明会の準備。

10・1 現地説明会。

10・3 本日から秋の現場班も稼動する。第252次調査区のうち、西側溝のFライン以南とHP14区

の井戸を秋の現場班が引き継ぐ。西側溝は、Fライン北とRラインの11ライン以東に畦を再設定。D～Fラインでは青灰粘土層の上面を確認する。R～Dラインでは、青灰細砂層を掘り下げ、奈良時代後半期の西側溝東岸の検出作業をする。北東拡張区では、西側溝部分の暗灰砂層の掘り上げ。II11区の曲物埋設取水遺構(SX6422)は、実測後、写真撮影。木棺墓は、畦をはずしたところ、頭部付近で水晶玉を検出する。遺物出土状況の写真撮影後、方形漆器を除く、土器、漆器等の遺物を取り上げる。畦を再設定し、棺輪郭線の内側を掘り下げる。掘形ラインが現状掘削面より、深く落ちていくように見えるが、なお、精査が必要。井戸(SE6432)の実測。

10・4 西側溝の堆積状況を観察するため、CラインとRライン南で試掘。Rライン南では、ほぼ溝底まで掘り下げ、木屑層も確認する。Rライン以南では、掘り下げの範囲をNラインまで広げる。西側溝東岸確認のため、青灰細砂層を掘り下げ、暗灰粘土面に達する。遺物は非常に少ない。北東拡張区では、西側溝最下層の褐色粗砂層の掘り下げ。IN10区で木杭を検出。木棺墓は棺身部分の掘り下げ。高台付土師器碗の下から銅銭出土。遺物を取り上げたところ、棺材(底板)が遺存していた。南北畦沿い南端でも断ち割る。棺身部と掘形の落ちは明瞭であるが、掘形の底は依然として不明。断ち割った底面で、横棧の痕跡と思われる灰色粘土帯を検出する。

10・5 西側溝堆積土のうち、暗灰粘土層と灰色砂粘層については、土層の境が不明瞭のため、遺物は一括して暗灰粘土で取り上げる。北東拡張区では、写真撮影の後、平面実測の準備。木棺墓は、棺身部分の掘り下げ後、実測図の補足。棺西側の縦棧状の灰色粘土帯は、棺側の圧痕と判断し、棧ではないと理解する。棺内完掘後の写真撮影。脂肪酸分析のため、木棺墓の土壌を採取する。

10・6 西側溝は、Nラインまでは暗灰粘土層をほぼ完掘する。暗灰砂層の掘り下げにかかり、Cライン以北を除き完掘する。暗灰砂層の下の木屑層は、Bライン以北では東岸、B～Pラインでは西岸に堆積する。暗灰砂層からは、金属製人形、神功開寶、刀子、木印等が出土。QT10区で、南北に並ぶ柱根3本を検出。橋脚にでもなるのであろうか。溝対岸にある石も、これと関連する可能性がある。北東拡張区は実測終了。木棺墓は、掘形底も現状の棺底と変わりのない浅いものであることが判明。横棧も掘形底に食い込んでいるものと判断する。掘形埋土も掘り上げたが、遺物はなく、埋め戻して終わる。

10・7 西側溝は、西岸の木屑層の掘り下げ。Rライン畦以南は、木屑層とその下の褐色粗砂層も

掘り下げる。Rライン畦以北では、東岸の検出作業後、西岸の木屑層を掘り下げをおこなう。Dライン以北では、東岸側を掘り下げる。

10・11 Rライン以北では、溝両岸の精査。褐色粗砂層を残して完掘に近づく。Rライン以南では、褐色粗砂層を完掘する。B～Cラインの溝西側底でしがらみの杭とみられる木杭6本を検出。HL12～13区の東西畦をはずす。畦の北に残っていた石と塙の入った灰色砂質土は浅く、これを除去すると、HK12区から続く南北溝が終わっていることが判明した。

10・12 Rライン以北は西側溝最下層の褐色粗砂層を完掘。和同開珎、鉄人形、銅人形等が出土。複雑な様相を呈していたため、保留していたNライン以南の作業を開始する。西側溝東岸はほぼ確定できたが、西は一部不明瞭。地山が崩壊した黄粗砂を含む青灰細砂層を掘り下げるが、西の溜りからの流入土によりわかりにくくなっている。

10・13 Fライン北の畦を、層ごとに遺物を取り上げながらはずす。Nライン以北は、後日の写真撮影に備え清掃。Nライン以南では、西側溝上層の青灰細砂層を掘る。調査区南端のJライン北で試掘したところ、かなり深いところから中世(10世紀末～11世紀)の土師器が出土した。しがらみを設けたのは、それ以降のことになる。

10・14 昨日にひき続き、調査区南端で、西側溝の掘り下げをおこなう。しがらみの部分の下に大きな溜りがある。Kライン南側の石、杭ともに、この溜りに関係するものと考えられる。昨日の土師器はこの溜りの底から出土したものである。この溜りは奈良時代の東一坊大路西側溝の一部を掘り下げてつくったものらしい。西側溝古→西側溝新→石と杭で壁を固めた溜りをつくる→しがらみを設ける、という変遷をたどるのであろうか。

10・17 Nライン以南の西側溝は、暗灰粘土層を完掘し、暗灰砂層の掘り下げにかかる。HP14区の井戸(SE6432)を掘る。井戸枠は上端から1m弱で終わる。井戸埋土は粘土で、井戸底は灰褐粗砂である。井戸底から須恵器双瓶、木片が出土。

10・18 西側溝はNライン以南を完掘し、写真撮影。井戸の断ち割り断面図の作成を終える。

10・19 井戸枠の取り上げ。Rライン畦で土壌サンプルの採取。西側溝実測の準備にかかる。

10・20 完掘後の西側溝の平面実測図と土層図の作成。

10・24 平面実測とRライン畦の土層図のチェック。先入観を排し、改めて線引きし、図面作成。

10・25 平面実測終了。橋脚(SX6420)部分の断面図の作成。溝土層図の最終チェック。

10・26 橋脚3本を取り上げ、調査終了。

C 第253次調査

6AHG—P・Q区、6AHH—G・H区
1994年10月13日～12月27日

10・13 調査区(東西61m・南北63m)の西辺に、第254次調査区の重機排土の搬出路が必要なため、26ライン以東から調査をはじめ。ベルコンをセットし、26ラインから東に向けて、遺物包含層の黄灰土を除去しつつ遺構検出を開始。遺物は少ないが、東西畦の北で、柱穴がいくつかでてきた。

10・14 遺構検出面は、O～Hラインでは褐斑灰色粘質土であるが、その北のH～Jラインは砂地で、Oラインから南は褐色土となる。26ライン東のC～Fラインに柱穴が4個南北に並ぶ。東西畦の南では25ラインまで進むが、遺構はほとんどない。Nライン付近では、褐斑灰色土が溝状に東西方向に延びる。

10・17 24ラインまで遺構検出。砂地は、北端からHB24区まで広がり、その西側の褐斑灰色粘質土は整地土になるようである。Nライン付近の溝状の褐斑灰色土は24ライン西でなくなる。Jライン付近にも砂層があり、24ライン付近では北へ広がる。

10・18 第252次調査区西側溝写真撮影のため、作業なし。

10・19 十六坪南の七条間北小路は、六条大路

道路心から計算すると、Mラインがほぼ道路心になる。小路は幅6mほどと推定されるので、Nライン北の褐斑灰色土が北側溝かとも考えられるが、この土は24ライン付近でなくなる。Oラインの南1mにも土の違いがあるが、24ラインの東では不明瞭になる。Kラインから南1.5mほどの間は、白斑赤橙色砂質土が溝状に東へ続くようである。その南は砂地(一部粗砂)となる。

10・20 東西畦南のG地区では顕著な遺構はない。Kライン南の白斑赤橙色砂質土は東へ続いている。東西畦北のHC22区、HE22区で柱根の残る柱穴を検出。その間には柱穴が見つからない。さらにその東、21ラインの西で柱穴4個を確認。23ラインのF～Hラインで、南北に並ぶ柱穴4個を検出する。

10・21 21ライン西の柱穴4個は、掘形の大きさが一定しない。Kライン南の白斑赤橙色砂質土は、まだ東へ続いている。

10・24 東西畦の北では、柱穴を順調に検出する。ただし並びはそれほどよくはない。東西畦の南には顕著な遺構がなく、遺構検出面の土の違いを追っている。Kライン南の白斑赤橙色砂質土

は、東西溝の埋土としてよさそうである。幅が少し細くなったが、東へ続いている。

10・25 遺構検出作業は南北畦を越える。東西畦北のDラインとFラインの柱穴は、18ラインの西で東妻を検出し、2間5間の東西棟(SB6500)となり、第252次調査で検出した建物(SB6425・SB6426)と柱筋が揃う。ただし、西妻の南北端の柱穴は未確認。また、建物南側にあるいくつかの柱穴は、南廂が付く可能性を残している。Kライン南の東西溝は、ますます不明瞭になってくる。溝ではなく、築地、あるいは土塁の崩れたものであろうか。

10・26 15ラインまで遺構検出。東西畦をはさんで柱穴を検出するが、建物としては、まだまとまらない。Mラインをはさんで幅3mほどの溝状遺構が表れた。小路に由来するものであろうか。

10・27 16ラインの東、Q～Tラインに並ぶ柱穴4個の東でさらに柱穴を検出し、2間3間の南北棟(SB6490)としてまとまりそうである。ただし、東側柱の北から2つめが不明瞭。Kライン南の白斑赤橙色砂質土は、16ライン付近で不明瞭になってしまう。Oラインの南には東西の溝状遺構が表れた。

10・28 11ライン西まで黄灰土を除去する。GN13区で土坑(?)から漆器片出土。ただし、平面形は不明瞭。12ライン付近から東には、西側溝の堆積土と考えられる土がある。

10・31 10ライン以東は重機による掘削が20～30

cmほど、Rライン以南は50cmほど浅く、掘り下げが難航する。11ラインの東1m付近で、西側溝西岸らしい土の違いを検出。東西畦の南のHA～GRラインまでは、顕著であるが、東西畦の北では土の違いがはっきりしない。昨日検出の12ライン付近の土の違いは、溝最上層の乱れと考えられる。

11・1 西側溝西岸の検出作業をするが、いま一つははっきりしない。Mライン付近で、逆L字形に西に曲がる土の違いがあるが、小路側溝によるものであろうか。Tライン付近の試掘で、96ライン東1.5mほどに東岸の上がりが見えるが、Sライン以南は、調査区壁面が近く、掘り下げが危険なため、96ライン東1mまでしか発掘できないであろう。Kライン以南はさらに控えなければならぬ状況である。PL97区で大土坑を検出。Kライン以南は、小路との関係もあり、しばらく、掘り下げずに保留しておくことにする。

11・2 97ラインより東に向けて黄灰土を除去。東西畦の南は、調査区東壁がオーバーハングして危険なため、急遽重機によって、壁に法面をつける。東西畦の北は、東壁から96ラインの東1.2mまで掘ることにする。Jライン南に土層観察用の畦を設定。

11・4 西側溝東岸の精査。第252次調査区南端で検出された溜りにはじまるものと考えられる平安時代の新溝(SD6415)の堆積土(土層名は新溝暗褐粘質土)を除去しつつ東岸を検出する。Jライ

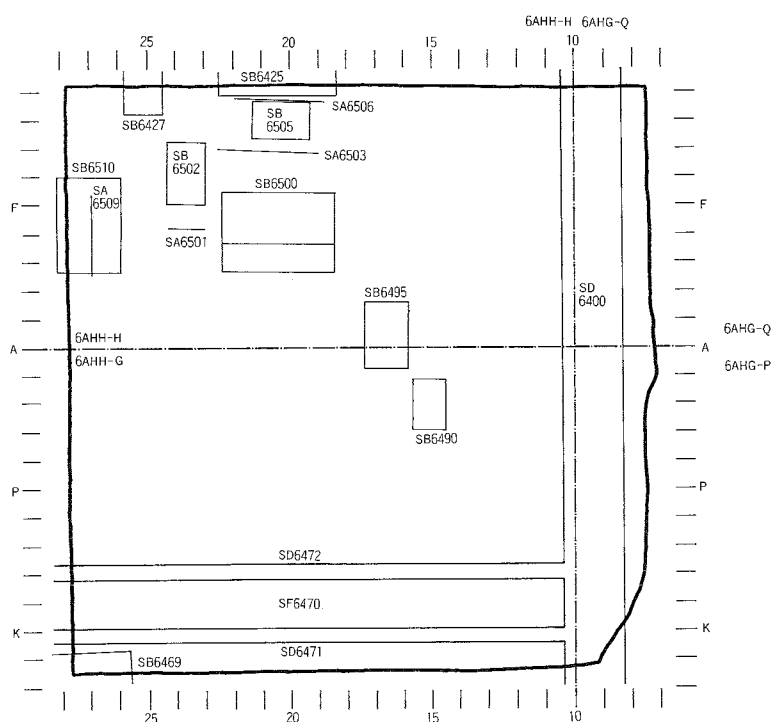


Fig. 5 第253次調査区遺構略図

ンからEライン南1 mまでは東岸を検出したが、それより南は、新溝が東へ広がっており、検出できない。新溝の東岸は北の方では、ほぼ10ラインにあるが、徐々に東にずれ、Aラインの東西畦では、96ラインの西1.5 m付近になる。新溝からは、12世紀の瓦器が出土した。調査区南東隅は、斜行する用水路に接しているため、調査区南東角が斜めになる。

11・7 新溝を掘る。一番広がった時の新溝は、第252次調査で検出した溝最上層にあたる。西側で11ライン付近にあらわれる土の違いもこの時期にあたるのか。A～Eラインでは新しい東への広がりがあり詳細不明。Oラインに土層観察用の畦を設定し、北側を試掘することにする。

11・8 新溝は、東西畦以南では西偏し、調査区内で大きく蛇行している。PR96区で、12世紀初頭の碗が出土した。Oラインの試掘で西側溝最下層の褐色粗砂層まで掘り下げる。東西に並ぶ杭7本を検出する。新溝の範囲を確認するとともに、11ラインの東1.2 mの位置で西側溝の西岸を確認した。

11・9 東西畦の南では、西側溝西岸の検出。Lライン以南は、新溝の検出。坪境小路両側溝からの流れ込みを思わせるような堆積は、今のところ確認できない。

11・10 東西畦の南では、新溝の掘り下げを終了し、写真撮影。L～Mライン間で新溝の東側に大土坑があるが、周辺は沼状で、遺構検出に苦勞する。西側溝西岸の精査。M～Aライン間はほぼ確定したが、部分的に不明瞭な箇所がある。Kラインの南1.2 m付近から北には、溝堆積土かと考えられる青灰細砂層があり、坪境小路に関係する可能性がある。Mライン付近にも溝らしい堆積があるので、坪境小路心はLライン付近になるのかもしれない。

11・11 西側溝西岸の精査でOラインから北は確定した。昨日不明瞭であったB～Cライン間で、北東から南西へ斜行する溝(SD6482)を検出。この溝は西側溝に達したところで途切れている。L～Mライン間も西から溝が入り込んでいられるらしく不明瞭。一方、J～Kライン間にある青灰細砂層は東西带状に続いた白斑赤橙砂質土層とつながる可能性がでてきた。

11・14 西側溝の掘り下げ。東西畦以北は青灰細砂層、東西畦以南、L～Aライン間は暗灰粘土層を掘り下げる。Lライン以南は黄灰土層を掘り下げ、坪境小路の精査。HC10区で、青灰細砂中から合わせ口甕棺(SX6485)が出土。東西畦以南は、N～Oライン間は暗灰粘土層を掘り上げ、暗灰砂層を掘りはじめる。Nライン以南では、小路側溝の検出。Mライン南とKライン付近に東西溝があ

り、これが小路の両側溝になるのであろうか。ただし、六条大路道路心からの距離では、想定位置より南になる。

11・15 西側溝東岸の精査。暗灰粘土層を掘り下げる。東西畦北では、BラインからFラインの北1.5 mの間を東へ0.5 m拡張する。Fライン付近で奈良時代以前の斜行溝を検出する。B～Cライン間の西岸で検出した溝(SD6482)の延長と考えられる。東西畦南では、Tライン付近で木屑層らしき土層を検出する。東岸はQライン付近で、東へ広がる。東からの流入路(SD6463)があるのであろうか。Oラインでは、東岸に東西溝(SD6462)があり、西側溝東岸が不明瞭になる。Oライン畦の南で、東西に並ぶ杭をさらに4本検出する。東岸沿いのNラインで、南北に並ぶ合わせ口甕棺2基(SX6460・SX6461)を検出する。Mライン以南では、西側溝は東へ広がる。Lラインの12ライン以西では、地山が高く残っており、その南北が溝になるらしい。やはり、これが坪境小路になるようである。

11・16 東西畦以北では、HC10区の土器埋納遺構(SX6485)を残して、西側溝の平安時代以降の層を掘り終わる。東西畦以南のNラインまでは、暗灰粘土層を除去した。Nライン以南では、西から流入する溝堆積土の範囲が定まりにくく難航するが、Lラインの南北にある溝は、やはり坪境小路にともなう溝であると考え、北側の溝を東西溝1(SD6472)とした。

11・17 東西畦の北では、西側溝の暗灰粘土層を掘り下げ、一部暗灰砂層も下げはじめる。暗灰砂層は、木屑層を浸食するように中央付近に厚く堆積し、両岸近くに木屑層が残るようである。東西畦以南では、暗灰粘土層、暗灰砂層を掘り下げるとともに坪境小路の検出作業をおこなう。北側溝(SD6472)はかなり深く、埋土は青灰細砂。これに対し、南側溝(SD6471)は浅く幅も狭い。

11・18 西側溝の掘り下げ。東西畦の北では暗灰粘土層を完掘し、暗灰砂層を掘り下げる。東西畦以南ではOライン以南で、暗灰砂層の掘り下げ。PK96区の暗灰砂層から、ほぼ完形の鉄鋤・鍬先が出土する。

11・21 西側溝は、いよいよ遺物を多量に含む層に入る。東西畦以北では、暗灰砂層と木屑層、東西畦以南では、Oライン以南の暗灰砂層から褐色粗砂層の掘り下げ。銅銭、小銅鏡、銅鈴、土馬、木簡などが出土。

11・22 東西畦以北では西側溝を完掘。F～Hライン間では、溝底に大きな窪みがある。C～Dライン間では、溝の中に小さな窪みが並ぶ。橋にでもなるのであろうか。東西畦以南もOライン以南はほぼ完掘。坪境小路との関係を確認するまで保

留してあったO～Tライン間の暗灰粘土層の掘り下げをはじめ。銅銭、海老錠の牡金具、木簡などが出土。

11・24 西側溝は、O～Tライン間の暗灰粘土層と暗灰砂層の掘り下げ。ベルコンを西側溝末完掘部分と坪内精査用の2系列に組み直す。

11・25 西側溝は、引き続きO～Tライン間の暗灰粘土層と暗灰砂層の掘り下げ。これと並行して東から小路側溝と坪内の精査を開始。小路北側溝は13ラインまで確認。小路南側溝は、東端では3時期重なっているらしく、それぞれを東西溝2～4とする。本日、第254次調査区の排土搬出路が撤去され、西端(28ライン)までの調査が可能になる。

11・28 第254次調査区の排土を処理していたブルドーザーに北の電源本線を切られたため、西側溝の作業を中止。坪内の精査に集中する。東西畦の北では、一削りして地山のチェック。坪境小路北側溝は、13ラインあたりから少しずつ浅くなっているようである。南側溝は、幅が少し広がり、西の方で検出していたKラインの白斑赤橙砂質土につながりそうである。また、東西溝2は、14ライン以东だけの掘り直しと判明した。

11・29 西側溝O～Aライン間をほぼ完掘する。坪内では、11～13ライン間で、東西畦からRラインにかけて、井戸2基(SE6479・SK6483)と南北に長い土坑2基(SK6481・SK6486)を検出する。小路両側溝の掘り下げ。

11・30 西側溝を完掘する。溝底は西高東低。また、Rライン付近の西岸近くに、斜めに打ち込まれた木杭があり、その上に大木が横たわる。東側にも自然木らしき大きな木があり、ここに橋があった可能性がある。坪内は、PQ13区の井戸状の大穴(SE6489)を15 cmほど下げる。坪境小路両側溝の掘り下げは、16ラインまで到達。

12・1 引き続き坪内の精査をするが、東西畦の北には、顕著な遺構はほとんどない。東西畦の南では、遺構精査の結果、GS14区で新たに柱穴を検出し、2間3間の南北棟(SB6490)としてまとまった。小路北側溝は、遺構検出面と溝堆積土の区別が難しく難航する。GL16区で幾何学文様の浮彫にした埴が出土。

12・2 東西畦をはさむGT～HCライン間、15～18ライン間で、建物がまとまる。2間3間の南北棟(SB6495)であるが、南面の柱割が4尺+7尺+4尺、あるいは、4.5尺+6尺+4.5尺と変則的である。南入りの建物になるのだろうか。一方、昨日検出した南北棟(SB6490)は6尺等間らしい。坪境小路両側溝の掘り下げは、18ライン付近まで進む。

12・5 坪内の精査は南北畦の西に入る。HHラ

イン以北の遺構検出に手間取る。HH～HJライン間に建物、その南に東西塀がある可能性がでてきた。HJラインの南に並ぶ小柱穴は、第252次調査区の東西棟の南廂(SB6425)になることが判明した。HC～HGライン間の東西棟(SB6500)の南廂が揃う。南北畦の西では、GSラインに井戸らしき遺構(SK6491)を検出。小路北側溝は18ライン以西で溝幅が狭くなる兆候がある。南側溝は、南北畦より西は、少し幅が広がっている。

12・6 坪内精査用と小路側溝用の2系列にベルコンを組み直す。HH～HJライン間の建物は、2間3間の東西棟(SB6505)と考えられるが、北側柱の検出に難航する。HC～HGライン間の建物(SB6500)は、南北側柱の西端の柱穴を検出し、柱穴がすべて揃った。その北西でも、いくつか柱穴を検出する。小路両側溝は22ライン付近まで完掘する。

12・7 26ラインの東、C～Fライン間に7尺間隔で並ぶ4個の柱穴の西約3mの位置で、柱穴2個を検出。Dライン付近には柱穴がないので、東西棟になる可能性がある。小路両側溝は26ラインまで掘り上げた。北側溝は2時期あるらしい。南側溝は、22ライン付近で底に倒木、その西に窪みがあり、それ以西は底が浅くなる。

12・8 H地区では、Hライン以北は地山が砂。精査の結果、23ライン、F～Hラインの柱穴の東でも、柱穴を検出し、2間3間の南北棟(SB6502)としてまとまる。HG27区の土坑(SK6507)から、須恵器壺が出土。C～Fライン間の柱穴は、結局10個になったが、建物としてはまとまりにくい。小路両側溝は完掘した。南側溝は、GJ27区で北岸が南に寄って溝幅が狭くなっている。ここに板を渡して橋にしたのであろうか。GJ24区では、溝底が砂となり、これを延長すると、HC10区の斜行溝(SD6484)に一致する。空撮の対空標識を打つ。

12・9 空撮の予定であったが、雨のため中止。13日に延期する。

12・12 空撮の準備。坪境小路周辺を残して清掃完了。

12・13 空撮に向け、清掃、排水作業をおこなうが、天候回復せず、空撮は中止。明日に延期する。

12・14 空撮後、地上写真撮影。空撮に手違いの連絡がはいり、明日再撮影することになる。

12・15 空撮の再撮影。その後、記者発表。午後からは、昨日に引き続き地上写真撮影。

12・16 午前中で地上写真撮影終了。現地説明会の準備。東西畦のうち西側溝部分の土層図作成と土器埋納遺構3基(SX6460・SX6461・SX6485)の実測。

12・17 現地説明会。

12・19 西側溝東岸、路面上にある土器埋納遺構

(SX6460・SX6461)の断ち割りとし岸の井戸状遺構(SE6479・SK6483・SE6489)の掘り下げ。1基(SE6479)は、瓦器の時期の井戸と推定される。西側溝Oライン畦土層図の作成。

12・20 脂肪酸分析のため土器埋納遺構の土壌を採取し、土器を取り上げる。Aライン畦とOライン畦で西側溝の土壌を採取。井戸状遺構をさらに2基(SE6466・SE6478)掘る。昨日と合わせ、5基の内、1基は井戸でないことが判明し、残る4基も井戸枠は残っていない。柱穴の断ち割りをはじめる。

12・21 ひき続き、柱穴の断ち割り。GT18区の井戸状遺構(SE6492)を掘るが、やはり井戸枠はな

く、旧流路にあたるのか、底から流木が出土した。HC10区の土器埋納遺構(SX6485)の土器を取り上げる。調査区南壁の土層図作成。

12・22 西側溝の流木のサンプリング。柱穴の断ち割りとし調査区南壁の土層図作成を継続する。

12・26 柱穴の断ち割りとし土層図の作成。漆塗木製品を出土し、墓の可能性も考え保留していた、GN13区を精査した結果、西から続く溝状遺構(SD6477)の東端にあたることが判明した。

12・27 柱穴の断ち割りとし畦の土層図作成完了。HF25区の炭入土坑(後日、南北棟SB6510の東廂、北から1間目の柱抜き取り穴と判明)の土器を取り上げ、調査終了。

D 第254次調査

6AHH-G・H区

1994年11月15日～1995年4月6日

11・15 東西55 m、南北55 mの調査区を設定し、南西端と北西端から重機2台で排土を開始。

11・21 調査区南辺の排土は第253次調査区との境界まで到達する。

11・26 重機による排土終了。

12・9 第253次調査の空撮延期のため、午前中、調査区西辺と南辺の整形と排水溝を掘る。

12・16 ベルコンをセット。

12・19 一部地区杭を打ち、東辺から黄灰土の排土を開始(～12・26)。Dラインの南には、第253次調査区から続く柱穴がある。

12・27 黄灰土層の除去は35ライン付近まで達

す。残りの地区杭を打つ。

1・9 37ラインに南北畦を設定。調査区北端はIラインとする。小路交差点調査のため、東西14 m、南北10 mの南西拡張区を設定する。35ラインから西に向け、黄灰土の除去を進め、ほぼ南北畦に達する。

1・10 黄灰土の除去を続行。この時点で確認できる遺構については、輪郭線をひきつつある。ただし、掘り下げはしていない。HA35～HA37区で検出した柱穴は、2時期あるようで、新しい柱穴の抜き取りには遺物がはいる。北側溝は、南側溝に比して、幅が広いようである。南西拡張区は、

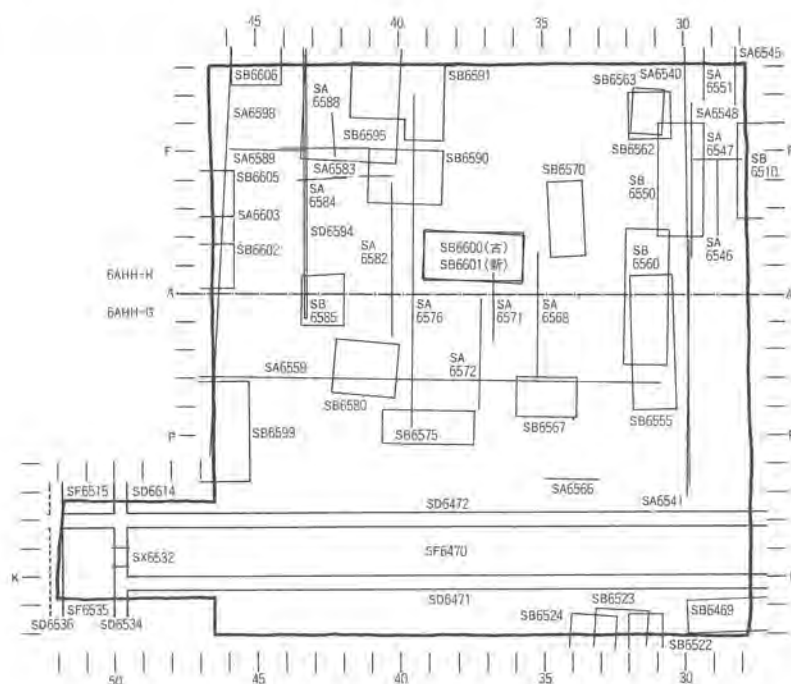


Fig. 6 第254次調査区遺構略図

重機の退路を確保するため、西端を水路より2mのところに縮小して排土をはじめる。

1・11 黄灰土層の除去は41ラインの東まで達す。東西畦北のHA36～HA39区にかけて並ぶ柱穴には、布掘地業状の遺構がともなう。HD・HEライン付近の37ラインから西に柱穴がでてきた。東西畦南のGN38・GN39区には、土器片がきわめて多く、また瓦が集合している。

1・12 東西畦北では布掘地業状の遺構が続く。HD40区で西妻を検出し、東西畦北の柱穴群は2間5間の東西棟(SB6590)としてまとまる。東西畦南では、GK～GNラインの42ライン付近に、灰色粘質土の入った土坑がいくつかある。

1・13 東西畦北の44ライン以西では、遺構検出面が灰白粘質土層となり、遺構がみにくくなる。

1・18 黄灰土層の除去は一部を残し、西端に達す。HHライン付近の灰白粘質土層は遺物を多く含んでいる。HA46～HE46区の西壁沿いに、柱穴が並ぶ。南西拡張区にベルコンを並べる。

1・19 黄灰土層の除去が終了。西から本格的な遺構検出を開始し、45ラインまで進む。調査区の外へ続く建物3棟(SB6599・SB6602・SB6605)、南北の掘立柱塀3条(SA6597・SA6598・SA6604)を検出する。小路側溝は輪郭のみの検出にとどめ、掘り下げず。南西拡張区は排水溝を掘り、東から黄灰土層の除去を開始。

1・20 HE～HHラインの45ライン付近には灰色粘質土層が広がる。HC46区で重複する柱穴の新旧関係を検討した結果、東側の建物(SB6605)の方が塀(SA6604)より新しいことが判明した。GN45区の柱穴(SB6599の東廂南端の柱)を探すが、本日も確定できず。その東には、暗灰粘質土のはいる土坑がある。調査区南辺の45ラインから東では、土器片を多数含む土坑(SK6528)を検出する。土器は古いので、奈良時代初めの遺構であろうか。南西拡張区の黄灰土の除去は、49・50ラインの中間まで進む。

1・23 遺構検出は43・42ラインの中間まで進む。HFラインに小柱穴が東西に並ぶが、複数の遺構があるようで、検討を要す。東西畦をはさんで、柱穴を検出する。東西棟になるのだろうか。東西畦の北の布掘地業状とみていた遺構は、重複関係から、柱穴より古い時期の東西溝となった。南西拡張区では、黄灰土層をほぼ取り終わる。

1・24 東西畦にかかる建物(SB6585)は、北側柱は東西3間で収まる。東西畦南では、Pラインにかけて延びる遺物を含む南北に長い土坑を掘る。七条条間北小路両側溝について、41ラインで断面を観察した結果、北側溝の堆積は、上下2層あることを確認した。上層の灰色土を東西溝上層として、明日以降は、上層のみ掘り下げることにした。

南西拡張区の遺構検出をはじめる。東一坊坊間東小路の東側溝が南北に通じ、そこに七条条間北小路の両側溝が合流する。それより西では、溝状土坑などがあり、東西溝も確認できない。

1・25 東西畦の北では、HDラインから北で、多くの柱穴が重複して検出される。いくつかは、建物としてまとまりそうである。東西畦の南では、40～41ライン間の南北に長い溝状土坑を掘る。南西拡張区では、薄く残っていた包含層を除去し、再度遺構検出。東一坊坊間東小路の北半部には、重複関係から東側溝より新しい、塀を多く含む大土坑があり、これを掘り下げはじめる。

1・26 東西畦の北では、北西区中央やや東の2間5間の東西棟(SB6590)など、多くの柱穴がいくつかの建物にまとまりつつある。HA区に並ぶ柱穴は、39ラインで西妻を検出した結果、2間5間の東西棟(SB6600)としてまとまりそうである。東西畦の南には、遺物の混じる灰褐粘土層が広がる。溝状土坑、土器溜り等を掘っていく。本日から、南西拡張区はいったん休止。

1・30 昨日検出の東西棟(SB6590)の北側で、2間5間の東西棟(SB6591)がまとまった。HF38区で検出した東西に並ぶ柱穴2個は、北側の東西棟(SB6591)の南廂と考えたが、西に続かない。南側の東西棟(SB6590)の北廂としても、柱間が合わず、検討を要する。東西畦北の東西棟(SB6600)の北西隅柱は柱根が残っているが、2時期の可能性はある。明日チェックの予定。GRラインに並ぶ柱穴は東西塀の可能性がでてきた。

1・31 遺構検出作業は南北畦を越した。東西畦北半では、小溝が多く、遺構検出手間取る。懸案の東西畦北の東西棟は、柱穴8ヶ所について検討し、2時期と確定した。古い柱を抜き取り、その抜き取り穴を掘形として、新しい柱を立て、最後にその柱も抜き取っている。古い抜き取り(新しい掘形)を抜き取りA、新しい抜き取りを抜き取りBとする。東西畦南ではGRラインに東西塀(SA6559)が続き、その北では南北畦の東西で、2条の南北塀(SA6571・SA6573)を検出する。

2・1 東西畦の北では、東西棟(SB6600)の東妻を再検出し、2間5間で確定した。35ライン東、HC～HEライン間で、南北に並ぶ黄褐土の入る柱穴4個を検出する。35ライン西では、東西畦をはさんで、南北5間の小柱穴を検出した。昨日の南北塀の北半を西側柱列とすると南北棟になるが、妻柱がないので南北塀(SA6568)であろう。東西畦南では、35～36ライン、GP～GRライン付近で、東西棟になると思われる柱穴を検出する。

2・2 東西畦北の柱穴は、結局、2間5間の南北棟(SB6570)としてまとまった。その北は、堅い地山であるが、遺構はない。逆に、南北棟のある

ところは、軟弱な砂層である。昨日問題になった2条の南北塀の間で、北妻にあたる位置に柱穴を検出したが、やはり南妻はない。36ライン東の柱穴は、2間3間の東西棟(SB6567)になった。GRラインの東西塀は、柱穴の重複関係から、東西棟より古いことが判明。GR32区、GS32区で、それぞれ井戸と思われる遺構の一部を検出する。

2・3 調査区北辺で、再び柱穴が重複して検出される。東西畦をはさんで、2棟の南北棟の一部を検出。昨日検出した井戸状遺構を掘る。GR32区の遺構(SK6556)は、埋土の状況から井戸ではなさそうである。GS32区の遺構は割り抜き井戸(SE6561)となる。GR31区周辺には、雑多な遺構があり、精査が必要。

2・6 坪を東西二分する30ライン東の位置で、重複する南北塀(SA6540・SA6541)を検出する。GRラインの東西塀(SA6559)とも重複する可能性があり、新旧関係を精査する必要がある。東西畦にかかる2棟の南北棟(SB6555・SB6560)は、いずれも2間6間と判明。桁行2間分ずれており、南側の方が古い。東西畦北半でも、2時期の総柱建物らしき遺構(SB6562・SB6563)などがまとまりだす。GR31区では堅穴住居址状の方形大形土坑(SK6556)を検出する。

2・7 遺構検出作業は東端に達す。東端近く、HC～HGラインで南北に柱穴が並ぶ。第253次調査区検出の柱穴群との関係が問題になったので、その部分を26ライン東まで再発掘したところ新たに柱穴を検出し、2間5間、東廂付きの南北棟(SB6510)としてまとまった。坪東西二分の一の南北塀は、GOラインよりさらに南に延びそうであるが、確認できなかった。

2・8 遺構検出作業は折り返し、西に向かうとともに、第253次調査区のHB～HIライン間の26ライン東から西の部分の精査する。坪二分の一南北塀のGOライン以南は、本日も決着がつかなかった。小路両側溝を掘りはじめる。北側溝では、既に除去済みの上層灰色粘土の下は、茶褐粘土層、暗灰粘土層となる。南側溝では、上層の灰色粘土の下は、茶褐砂質粘土層となる。この土と地山は、若干区別しにくい。

2・9 GR31区の住居址の可能性のある大土坑(SK6556)を5cmほど掘り下げる。GO30・GO31区の土坑(SK6552・SK6553)を掘り下げはじめる。GS32区の井戸(SE6561)を掘る。枠内の埋土は最上部に黄灰粘土があり、以下は灰色粘土。井戸枠は割り抜きで、下方に4ヶ所方孔があいている。坪二分の一南北塀はGNラインの南、北側溝の際まで延びていることが確定した。小路両側溝は34ラインまで完掘した。

2・10 GR32区東南の土坑(SE6557)を掘り下げ

たところ、やはり井戸にはならないようである。GO30・GO31区の土坑(SK6552・SK6553)は完掘した。GO30区の土坑については、井戸の可能性もあったが、これも井戸ではなかった。南北畦の西、O～Qライン付近で柱穴を検出し、2間5間の東西棟(SB6575)としてまとめる。ただし、北側柱列と南側柱列が揃わない。GRラインの東西塀(SA6559)は、39ラインの東西にある柱穴の柱間が広い。小路北側溝は、南北畦から西にかけて、部分的に溝底が深くなる。南側溝では、36ラインの東西で、溝底に2個の柱穴を検出する。

2・13 調査区北端のHGライン以北、39～46ラインを精査し、柱穴を検出。43ラインの西に南北に並ぶ柱穴とそれより古い南北溝(SD6599)を検出。この一帯については、明日再度検討の予定。小路両側溝は、39～43ラインを完掘。ただし、北側溝の41ライン以西については、上層を掘り下げていないので、茶褐粘土層、暗青灰粘土層とあわせて3層に分けて掘り下げる。南西拡張区の北西隅の大土坑を完掘したところ、その底で、七条条間北小路北側溝と東一坊坊間東小路東側溝の交差状況が表れてきた。GK50区で土器埋納遺構(SX6533)を検出。

2・14 北端部の精査では、43ラインでさらに柱穴を検出し、桁行5間以上の東西両廂付きの南北棟(SB6595)としてまとめることになった。その西廂と重複する、より古い南北溝(SD6599)は、さらに南に延びる。44～46ライン、Hライン以北で、総柱建物がまとまりそうである。HC43区周辺に広がる炭化物混じりの土を除去すると、黄白粘土層になるが、これも除去する必要がある。GN45区で、南北棟(SB6599)の東廂南端の柱を確定した。七条条間北小路両側溝と東一坊坊間東小路東側溝は、ほぼ掘りあがる。東側溝に架かる橋の柱穴4個を検出する。南北両側溝は、上層に瓦、土器が多く、下層には遺物がほとんど含まれない。北側溝の46～48ライン、南側溝の46ライン東～48ライン東では、溝底に細長い土坑がある。南側溝の土坑(SX6530)には、馬骨、土師器、転用墨書人面土器等が並べられ、祭祀土坑と思われる。重機により、南西拡張区の西側を拡張する。

2・15 北端部の遺構精査、遺構の掘り下げと並行して、HC43区周辺の黄白粘土層の除去を開始する。道路側溝は、すべて完掘した。なお、東一坊坊間東小路西側溝は、Mライン以南で、東岸のみを検出した。七条条間北小路北側溝底の土坑(SK6531)は壁が垂直に落ち、底も深い。南側溝の祭祀土坑の写真撮影。土坑内の馬骨等は、側溝に水の無い時に、穴を掘って埋めたものである。

2・16 遺構精査の続き。HC43区周辺の黄白粘土層を取り終わり、南北溝(SD6599)と小柱穴

を検出。南北溝が南へどこまで続くかは未確認。東西畦南では、土坑状の窪みにたまる灰褐粘質土層を除去。GO40～GS41区の炭化物の入った土坑をすべて掘り下げる。南側溝祭祀土坑の実測。空撮に備え対空標識を設置する。

2・17 遺構精査と空撮に向けての清掃。GT38区の大土坑(SK6577)、GN37区の炭化物の入った土坑(SK6574)を完掘。GN37区の土坑の下には、白色砂層が広がる。42・43ライン付近で柱穴を検出し、東西畦北の柱穴と合わせ、建物(SB6585)としてまとめようである。祭祀土坑の遺物の一部を取り上げる。

2・20 遺構清掃と掘り下げていなかった柱穴を掘る。十五坪の27～32ラインで、柱穴を多数検出し、掘立柱建物2棟(SB6469・SB6522)がまとまる。祭祀土坑の写真を撮り直す。GS32区井戸(SE6561)の平面図作成。

2・21 清掃と十五坪の遺構検出作業。昨日検出の東西棟(SB6469)は、さらに東にのび、桁行7間となった。地上写真撮影。

2・22 空撮。その前後に地上写真撮影。

2・23 調査区北東部から柱穴の断ち割りを開始する。午後、記者発表。

2・24 ひき続き柱穴の断ち割り。東西畦にかかる南北塀の柱穴については、畦を取って柱穴全体を平面検出する。現地説明会の準備。

2・25 現地説明会。終了後、祭祀土坑中の土器を取り上げる。

2・27 柱穴の断ち割り続行。祭祀土坑の馬歯を取り上げる。

2・28 断ち割りと並行して、祭祀土坑では、上半を既に取り上げた墨書人面土器の下半部を清掃し、写真撮影。土器の隣りにでていた馬歯は、土器に納められていたものの一部であった。明日実測の予定。馬骨集合部の周囲を掘り下げ、明日の取り上げに備える。

3・1 本日、断ち割りは中止。祭祀土坑は実測後、墨書人面土器を取り上げる。その後、ウレタンを注入して、馬骨の集合部等を取り上げる。また、東西畦の南、40～42ラインで、GRラインの東西塀(SA6559)と重複する位置で、2間4間の東西棟(SB6580)を検出する。

3・2 昨日検出した東西棟は、写真撮影後、平面実測。その後、柱穴の断ち割りを再開する。

3・3 南北塀(SA6540・6541)を中心に柱穴の断ち割り。GQ29区において、東西塀(SA6559)との交点には、柱穴が1つしかないことを確認。

3・6 坪東西二分の一南北塀とその西方の掘立柱建物(SB6555・SB6560)等の柱穴の断ち割り。

3・7 柱穴の断ち割り続行。

3・8 柱穴の断ち割りは、南北畦を越え、調査

区南西の区画に入る。

3・9 本日より、発掘作業は、第255次調査に集中し、図面作成に専念する。

3・14 第255次調査の発掘に集中していたが、本日より柱穴の断ち割りを再開する。南北畦の西、O～Qライン間の掘立柱建物(SB6575)は、2間6間の東西棟としていたが、西妻柱列は、断ち割りの結果、柱穴ではないことが判明した。その東に柱穴を検出し、2間5間の東西棟となった。東西畦にかかる総柱風建物(SB6585)は、やはり建物内部の2柱穴を欠く。

3・15 柱穴の断ち割りは、北西の区画に入る。

3・16 柱穴断ち割りの図面作成。明日は、第255次調査に集中する。

3・20 北西区北半の建物群の柱穴の断ち割り。2間5間東西棟(SB6590)の南西隅柱抜き取り穴からは、平城IIIと思われる土師器皿が出土した。

3・22 南北畦の北、東西畦にかかる新旧2時期の建物(SB6600・SB6601)の柱穴の断ち割り。新しい時期の東妻中央柱穴には柱根が残っていた。土層図作成のため、壁削りと畦際の掘り下げ。南北畦の西側南端近く、十五坪の北端で、柱根の残る柱穴を検出する。周辺を精査する必要がある。

3・23 北西区北半の建物の柱穴の断ち割り、畦際の掘り下げと並行して、昨日検出した十五坪北端の柱穴の周辺の遺構検出をおこない、東にさらに柱穴5個を検出する。

3・24 東一坊坊間路東小路東側溝にかかる橋(SX6532)の柱穴、十五坪の柱穴の断ち割りもおこなう。調査区南東隅の東西棟(SB6469)の第253次調査区にかかる部分を平面実測。東西畦、南北畦から、土層図作成に着手する。

3・27 十五坪の柱穴の断ち割り。

3・28 十五坪の柱穴と南側溝溝底で検出した柱穴(SX6525)の断ち割り。

3・29 柱穴の断ち割りは終了。土層図の作成。

3・31 昨日にひき続き、土層図の作成。

4・3 GS32区の井戸(SE6561)の断ち割りを開始。その東南の竪穴住居址と認識していた遺構(SK6556)は、東西畦を残して掘り下げを開始。約50cm下げたところ、井戸になりそうだったので、南半断ち割りに切り替え、約1mで底に達する。井戸を掘る予定であったが、湧水のない層に達したので、中止したと思われる。

4・4 GS32区の井戸とその南東の土坑の写真撮影。井戸の土層図作成後、井戸枠を取り上げる。

4・5 土層図の作成。

4・6 中央建物の南北畦にかかる南側柱の断ち割り。HG26区の土坑(SK6507)も断ち割りの結果、途中で中止した井戸と判断した。土層図作成終了。器材撤収し、作業終了。

E 第255次調査

6AHH-H・I 区

1995年1月10日～4月6日

- 1・10 調査区(東西57m・南北50m)を設定。
- 1・11 北西部から重機による排土開始。黄灰土層の途中までを取る。遺物は結構多い。
- 2・14 午後、地区杭打ち。
- 2・21 南から遺物包含層の除去をはじめる。
- 2・22 時間的に制約されているので、包含層除去と同時に遺構検出をおこなう。包含層は西へいくほど厚くなる。
- 2・23 包含層を除去すると、所々で砂層がみえ、地山面に凹凸があることを示している。遺構は、調査区中央から東側にかけて、比較的多く検出され、そのなかで、2間4間の東西棟(SB6620)がまとりそうである。また、Rラインでは、重複関係からこの東西棟の柱穴より古い、幅の広い東西溝(SD6621)を検出する。西側は遺構が疎か。
- 2・24 南北畦の東と西で、南北棟になりそうな柱穴を検出するが、まとりそうでまともでない。第255次調査区の柱穴は、第254次調査区の柱穴に比べて、概して小さい。
- 2・27 IBラインまで、作業は進む。調査区西端のIAラインに柱穴が並ぶ。桁行6間、もしくは7間の東西棟にでもなるのであろうか。
- 2・28 作業は東西畦に達する。東西畦南の35～36ラインで、2間4間の南北棟(SB6625)がまとも。その南東、33～35ラインの南北棟(SB6623)については、2棟の東西棟になる可能性がないか、再度検討が必要。39～40ラインでIAラインの北から南に並ぶ柱穴も、南北棟(SB6640)にな

るのであろう。昨日検出した、西端の柱列に対応すると思われる柱穴を検出するが、東西棟としてはまともでない。

3・1 東西畦より南の遺構検出作業は、概ね終了。これまでに、掘立柱建物7棟、塀1条が確認された。31～33ラインでは、東西畦の北へ延びる南北棟の一部と思われる柱穴を検出。その西側、東西畦の北にも数個の柱穴らしきものがある。

3・2 東西畦にかかる31～33ラインの柱穴は、2間2間の総柱建物(SB6626)でまとも。その西の一群も、2間2間の総柱建物(SB6628)になる。この建物の中央の柱穴は小さい。東西畦西端の排水溝で土層を観察したところ、厚さ約20cmの黄灰土層、厚さ約15cmの黄色土層、厚さ約10cmの茶褐土層となっており、整地土である黄色土層で遺構を確認できる。この層は、調査区全域で確認され、柱穴の埋土には、黄色土が含まれる。

3・3 南北畦に近い総柱建物(SB6628)の北東隅の柱穴の位置で、重複関係からこれより古い南北溝(SD6633)を検出する。北西区でも、北でやや西に振れる2間5間の東西棟(SB6652)等を検出する。

3・6 遺構検出面までが、次第に深くなってきたので、IHラインより北については、再度重機で排土する。IHライン西端の東西溝を掘り下げたところ、柱穴7個が東西に並んで検出された。IG40～IH42区で検出した大土坑(SK6656)は、埋土に土器、瓦を含む。

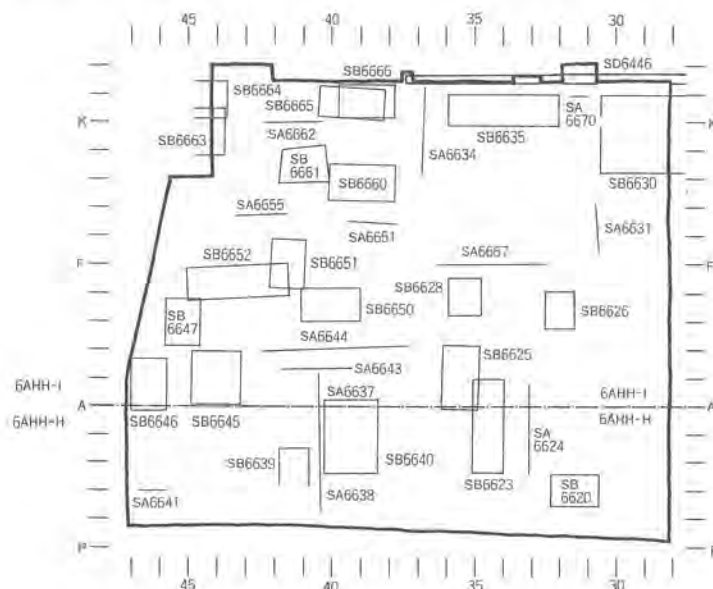


Fig. 7 第255次調査区遺構略図

3・7 昨日検出の大土坑を掘り下げる。土器、土馬が出土する。北東隅IIラインの北で東西に並ぶ柱穴を検出する。明日精査の予定。

3・8 調査区北端に近づくにしたがい、柱穴が多くなる。北東隅の精査では、桁行5間以上の南北廂付きの東西棟(SB6630)となった。IHラインの北、38~40ラインの建物は、2間4間の東西棟(SB6660)でまとまる。その北西の2間3間の東西棟(SB6661)は、重複関係からこれより新しい。

3・9 40~42ラインのIKラインより北で、多数の柱穴を検出するが、建物としてまとまらない。調査区北端で東西溝の一部を検出。第252次調査で検出した築地雨落溝(SD6446)と同一と考えられ、溝幅を確認するため、調査区を一部拡張する。溝は37ラインの西で途切れ、42ラインの西では、溝の位置で柱穴を検出している。また、33ライン北端で井戸らしき遺構を検出したので、ここも拡張する。遺構検出作業は北端に達す。

3・10 北端の東西溝の幅は約1mであることが判明。IF43区の大土坑(SE6653)の掘り下げをはじめ。土器が多数出土。39ライン西を南流する古溝(SD6642)の掘り下げを、北からはじめる。遺物はほとんど含まれていない。IK39区で古溝より新しい柱穴1個を検出する。

3・13 IH38区の大土坑(SE6658)を掘り下げる。方形の掘形を確認。井戸とみるが、掘形埋土に瓦器を含む。IH43区の大土坑(SE6657)を掘り下げたところ、縦板組の井戸枠を検出。枠内から斎串等が出土した。横木第1段までの暗灰青粘土を井戸枠内埋土、第1段以下の灰白ブロック混じり暗灰粘質土を井戸枠内埋土IIとする。南北古溝は、この井戸によって途切れる。IG37区の大土坑(SK6659)の底で、柱穴2個を検出。また、IG41区でも、精査の結果、土坑の底で、IHライン近くの東西塀(SA6655)に続く柱穴を確認する。IF~IJラインの32~36ラインでは、精査したが、顕著な遺構はない。

3・14 IF43区の大土坑(SE6653)を掘り下げた結果、井戸になった。検出プランは二重のドーナツ状を呈し、内側を井戸採取穴、外側を掘形として、遺物を取り上げる。抜き取り穴は次第に狭まり、約90cm下では、一辺1m程の方形の輪郭になる。埋土は灰褐粘質土で、遺物は井戸採取穴灰褐粘土で取り上げる。須恵器平瓶、甕、土師器甕、壺の完形品など、土器が多数出土した。土器は、抜き取り、掘形、いずれも平城II~IIIの時期である。南北古溝(SD6642)は、東西畦までは、やや西に偏しつつ南流する。

3・15 遺構の精査は、東西畦の南にはいる。東

西塀としたIAラインの柱列のうち、西の2個は柱穴でないことが判明した。東側の4個は、東西棟(SB6645)の南廂となる。南東区の柱穴についても、再度検討する。南北古溝は、旧流路と判断し、東西畦から南では、清掃時の平面検出にとどめることにする。土師器碗がまとまって出土したID41区の土器埋納遺構(SX6644)の写真撮影。

3・16 南西区では、HR~IAライン、39~40ラインの南北棟(SB6640)には東廂が付くことが判明した。

3・17 北東区では、南北畦の一部を半割し、畦際の東で、北で東に振れる南北塀(SA6634)の検出を試み、IDラインの北で、柱穴1個を検出する。また、北西区、東西畦北の東西棟(SB6650)の南側柱を確認すべく、東西畦の一部をはずし、ID39区で柱穴を検出する。南東区IBラインの南、33~35ラインの柱穴については、建物としてなかなかまとまらない。南北古溝は、東西畦の南では、南西に向きを変える。

3・20 空撮に向け清掃。対空標識を打つ。

3・22 清掃と壁削り。

3・23 空撮と地上写真撮影をおこなう。

3・24 昨日に引き続き、地上写真撮影。その後、柱穴の断ち割りををはじめ。

3・27 柱穴の断ち割り。

3・28 柱穴断ち割りを継続する。南西区西端の南北棟(SB6646)の東側柱、南から1間目の位置には柱穴がないことを確認。また、東西棟2棟(SB6660・SB6661)の重複関係を明らかにするため、柱穴を断ち割るところ、西の東西棟(SB6661)が新しいことを確認。また、IK43区では、断ち割りの結果、新旧関係が逆転し、南の建物(SB6663)が北の建物(SB6664)より新しくなった。

3・29 柱穴の断ち割り、図面作成は終了し、土層図の作成にとりかかる。調査区北端の築地雨落溝(SD6446)では、黄色土を埋土とする雨落溝の下層で溝状の土坑を検出する。調査区北壁で見え隠れしているので、蛇行しているのであろう。

3・31 土層図の作成。

4・3 土層図作成のため、東西畦から南で旧流路(SD6642)を一部掘り下げる。

4・4 ひき続き、土層図の作成。IH43区の井戸(SE6657)の平面実測。

4・5 IH43区の井戸を掘り下げる。縦板組の下は方形の枅、曲物となる。最下層の枅および曲物の中から木製品や多量の土器が出土。最下層灰褐粘土で取り上げる。井戸枠、枅も取り上げる。

4・6 井戸最下層の曲物を取り上げ、埋め戻す。器材撤収し、調査終了。